絶対天才！

～1031～

制作　SHOSAKU事務所
作者　花房尚作

（注）本作品の著作権はSHOSAKU事務所に帰属しております。本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

☆あらすじ

本作品は四つの話が同時進行していく。
１０３１の話、トラ吉の話、絶対革命団の話、二木田の話。
それぞれの話が時間軸をずらしつつ、絶妙なかたちでリンクしながら進んでいく。

○１０３１の話

ある日、日本政府に一本の毒ガス弾と脅迫状が送られてきた。送り主はアジアの密輸組織 absolute Genius、日本での通称は１０３１である。その脅迫状には敗戦時に日本軍が大量に隠した毒ガス弾を見つけたと記されており、その情報と引き換えに十億円分の金塊を要求していた。

日本政府は東アジアにおける影響を考え、秘密裏にＣＩＡに捜査を依頼した。極東担当のＣＩＡ捜査員であるイ・ソンスは、昇進のチャンスとばかりに独断で潜入捜査を進める。独自の手法で協力者をかき集めて取引現場の包囲に成功し、１０３１の正体を暴く絶好の機会を得た。しかし完璧である筈の包囲網は破られるのであった。

○トラ吉の話

ウンチク風来坊、横田トラ吉。トラ吉は東京大学在学中に商売を始める。その商売の手伝いをしていたユキちゃんと学生結婚し、幸せな学生生活を送っていた。しかし会社の売り上げがどんどん落ち、大量の在庫を抱えはじめた。慌ただしく日々を送っていたある日、ユキちゃんが末期の乳ガンだと分かった。それから一ヶ月後にユキちゃんはこの世からいなくなった。トラ吉の心の奥底にぽっかりと穴が空き、その穴を埋めるために会社を処分して地球を歩く放浪の旅に出た。

その道すがらコンゴ共和国の空港でＣＩＡのイ・ソンスに騙されて、１０３１への潜入捜査を余儀無くされる。捜査を進めていくなかでイ・ソンスに騙されている事に気付くトラ吉。突き止めた１０３１の日本支部の地図と引き換えにイ・ソンスから逃れた。

トラ吉は心の穴を埋めるため再び日本を飛び出してフィリピンへと向かった。

○絶対革命団の話

資本主義打倒を目指す活動家であり、ミュージシャンでもある萩原ケン。裕福な家庭に生まれながら、人生に悩み自殺を決意した柳井サクラ。この二人がつくったバンドが絶対革命団である。

柳井サクラは幼いころからコミュニケーションがうまくとれなかった。唯一の友だちであるユキちゃんの死をきっかけに自殺を決意していた。その自殺現場で萩原ケン太に出会い、バンド活動に生きがいを見つける。音楽の限界に挑むなかで、メンバー募集にやってきた二木田と出会う。そこで新種の麻薬であるエロインを手渡されたことで絶対

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

革命団はメジャーデビューを果たす。

○二木田の話

二木田はジャン・レノと呼ばれるフランス人と日本に密入国していた。二木田は拳銃の運び屋としてイ・ソンスに捕まり、１０３１への潜入捜査を余儀無くされる。秘密工作員となるべく厳しい訓練を受け入れるなかで、無軌道ではあるが、メキメキと工作員としての頭角を現わしていく。その天性の才能によって密輸組織の潜入などに手腕を振るう。が、しかし、日本政府を脅迫状していたのはジャン・レノだった。イ・ソンスは二木田を騙して利用しているつもりだったが、逆に利用されていたというオチである。

本作品のジャンルはサスペンスコメディー。

全般においてＪＡＺＺが流れている。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

☆作品にかけた思い　花房尚作

ＳＨＯＳＡＫＵ事務所の戯曲には三つの代表作がある。

一つ目はコメディー作品である『七人の無刀流』。二つ目はシリアス作品である『運び屋』。三つ目はサスペンス作品の『絶対天才！』。

それぞれジャンルは違うが、『愛と笑いを全世界に！』のキャッチフレーズに基づいて書かれた戯曲だ。

私は同じことを繰り返すのか嫌な性質で、『七人の無刀流』でコメディー作品をつくったら、もうコメディーを書く気がしなくなった。だから次に書いたのはシリアス作品の『運び屋』だった。次の作品はまったく違うものをつくりたかった。

私はいつも戯曲を書き上げてから稽古に入るのだが、この『絶対天才！』は稽古をしながら書き進めてみた。結末がどうなるのか誰もわらないまま稽古して、キャストと先の展開を予想したりもした。そうこうしていると針の穴に糸を通すような見事なサスペンス作品が出来上がった。正直、これほどまでに面白い作品が書けるとは考えてもいなかった。観に来てくれたお客様からは、「鳥肌が立った」とか「嫉妬した」といったお言葉をたくさん頂いた。

この時期、私を含めてＳＨＯＳＡＫＵ事務所のキャストに勢いがあり、私の背中をぐいっと押してくれた。主要キャストの五人でつくりあげたのも大きかった。まさに精鋭部隊でつくった作品で『絶対天才！』こそが、ＳＨＯＳＡＫＵ事務所の代表作であると自負している。

私は社会的な成功に運がないのだが、名作をつくりあげる運は持っている。

この一年後、最終公演『サイエンス・フィクション』をもって、ＳＨＯＳＡＫＵ事務所は休演を迎える。誠に残念ながら興業を続けていく気力を失ってしまった。己の未熟さを恥ずかしく思う。しかしまぁ、そうなってしまったのだから、それはそれで仕方がない。

ＳＨＯＳＡＫ事務所に関わってくれたキャスト及びスタッフのみなさま、心の底からありがとうございました。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

☆登場人物表

横田トラ吉
　東京大学中途退学。
　黄色の服装を好んで着用。
　アクセサリーを身に付けており、チャラチャラしている。

柳井サクラ
　東京大学中途退学。
　地味な服装を好み、時代遅れのダサい服を着用。
　化粧っ気もなく、さえない髪型をしている。
　ジャージ、メガネ、貧乳。

イ・ソンス
　ハーバード大学卒業。
　極東担当のＣＩＡ捜査員。
　スーツが似合う。革ジャンが似合う。
　ダンディズムな雰囲気がプンプンしている。

萩原ケン太
　京都大学中途退学。
　反資本主義活動家。ミュージシャン。
　ジャージ、作業服、五分刈りの頭。

二木田ジョゼフィーヌ
　オックスフォード大学卒業。
　派手な服装を好む。
　スタイル抜群。とても可愛い。

ジャン・レノ
　フランス人の殺し屋。
　黒のニット帽とオーバルのサングラス。
　見た目はジャン・レノそのもの。
（トラ吉役が二役やる）

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

絶対天才！

●オープニング

曲『枯葉（Ｊａｚｚ）』が流れて客電が落ちていく。

舞台に文字が浮かびあがる。

何もしなくてもいい。

そこに苦しんでいる人がいることを知るだけでいいのです。

マザー・テレサ。

●一場　トラ吉とサクラ

場所：ジャズ喫茶ＹＯＫＯＴＡ。

トラ吉「タクシーに乗ってたらガクンと来た」

台詞きっかけで明転。

『枯葉』はそのまま流れている。

店内にはこだわりが感じられる小物やコーヒー器具が並ぶ。

サクラ「また、故障？」

トラ吉「俺もそう思った。あっちじゃ二十年、三十年は平気で乗りまわす。日本の中古車がアフリカでは新車だからね。なんせタイヤのパンク修理で自転車用の空気入れを使ってんだから」

サクラ「そんなんで大丈夫なの？」

トラ吉「むこうじゃ走るっつうより、馬車と同じ感覚でゴトゴト転がしていく感じだからさ。ようは動けば良いんじゃない。で、どうすんのかなって思ってたら運転手が料金を前払いしてくれって言うんだよ。仕方ないから金を渡したら近くの屋台で１リットルビンに入ったガソリンを買ってきた訳」

サクラ「ガス欠か」

トラ吉「そう。でもね、タンクに全部入れないんだよ。少しだけビンの底に残すんだよ。それどうしたと思う」

サクラ「さあ」

トラ吉「飲みだしたんだよ」

サクラ「ガソリンを？」

トラ吉「後で聞いたんだけどさ、ガス欠の時ってタンクに１リットル入れただけじゃエンジンがかかりにくいんだ。だからキャブレターの配管を抜いてそこに口移しに注入するんだって。物騒に見えるけど丁寧な処置なんだよ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「うがいはするんだよね」
トラ吉「うがいなんかしないよ」
サクラ「え～～」
トラ吉「環境による慣れもあると思うけどそもそもの体のつくりが違うんだろうね。虫がわいた濁った水を平気で飲んでる」
サクラ「アフリカにはどれくらいいたの？」
トラ吉「なんだかんだで一年くらいかな。二年で地球はまわりきちゃって残りの一年はアフリカをうろうろしてた」
サクラ「アフリカってうろうろできるものなの？」
トラ吉「うろうろできるようになるまで三か月くらいかかった。危険なウイルスがウジャウジャしてるから、そこらへんは注射をしっかりうっておく。あと、それぞれの国の情勢をしっかり把握しておく。とはいっても何度も危険な目にあったけどね」
サクラ「私なんてとても無理だ」
トラ吉「サクラちゃんは女だからね。俺は男だし、なるようにしかならないって感じでさ、いつ死んでもいいやって思って捨て身でうろうろしてたから、逆にそれがよかったのかもしれないな」
サクラ「日本人のアフリカのイメージって大自然に囲まれた雄大な大陸みたいな感じだけど、それってほんの一面でしかないんだよね」
トラ吉「そうだね。アフリカにいるとさ、日本の戦国時代ってこうだったんだろうなって感覚になる。それぞれの民族がそれぞれの民族の利益のみ考えて、それこそ野生の動物のように弱肉強食の世界をつくってる。それぞれの民族が殺しあって、利益の奪い合いを繰り返して、勝った民族は負けた民族を虫けらのように扱うからアフリカの人びとが政権をつくってもすぐに崩壊しちゃう」
サクラ「でも、それはヨーロッパの植民地政策が原因でしょ。植民地政策でヨーロッパの国が地図上に定規で国境線を引いたから一つの国に複数の民族が押し込められたり、複数の国に一つの民族が分散したりする事になった訳でしょ。世界民族学の講義でカン・サンジュン教授がそう言ってたよ」
トラ吉「カン・サンジュン教授？」
サクラ「トラさん覚えてない？（カン・サンジュンのマネで）それぞれの国が独立した後もアフリカ大陸に眠るダイヤモンドや希少金属の利権を先進国が裏で奪い合うから混乱して収拾がつかないんだぞ。それがアフリカ内戦の難しい所だぞ」
トラ吉「あ～はいはい。似てる似てる（大喜び）」
サクラ「似てるでしょ（嬉しい）」
トラ吉「でもさ、それは使い古された常套文句だよ。俺は決して差別主義者じゃないけ

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ど、先進国の人びと、たとえば日本人の場合、機械が故障したら修理して動かそうとするだろ。効率的に物事を考えて、時間を大切にして、わずかな所持金で商売を始めてなんとかして生き抜こうとする。でもアフリカの人たちは機械が一ヶ所でも壊れたら捨ててしまうし、効率的に物事を考える知恵を生み出そうとしないんだ。なんでもかんでもすぐに諦めてしまって粘り強く生き抜こうとしないんだよ。どうしてアフリカの人びとは貧しさから抜けられないのか。それはアフリカの人びとが戦国時代の一般庶民のレベルしかないからなんだ。こう言うと差別主義者だって批判されるだろうけど、そもそもそういう批判する奴らって決して危険な地域に行かないし貧しい人たちとも話をしないんだ。そのほとんどが安全な地域に行って、既得権益を持ってる裕福な奴らと話をして、高級ホテルに宿泊して日本に帰ってくる。そうやって中途半端な知識で物事を語るから現実とズレがでてくるんだよ。そもそもそういう批判をする奴らって視野が狭くて他じゃ使えない奴ばっかだろ。そんな奴らが偉そうに語るから世の中がおかしくなるんだよ」

サクラ「相変わらず毒吐くね～」

トラ吉「儒教の孔子がさ、本を読んでそれを信じるなら読むなって言ってるけど、まさにそうだよ。本で読んだこととか耳できいたことってけっこう間違っているものなんだ。やっぱ現地に行って肌で感じないと分からないことってたくさんある。だからさ、俺の主張をサクラちゃんに納得してもらおうとは思ってないんだ。むしろ肌感覚が無いのに俺の主張をそのまま受け入れられると妙な勘違いをされてしまうからね。あくまで情報として頭の片隅に置いておく程度でいいと思うんだ」

サクラ「うん、わかった」

トラ吉「俺さ、村の長老さんに子ども達をちゃんと学校に行かせるべきだって言ったことがあるんだ。そしたらみんな村の小学校を卒業して半分が高校までいって大学にも行く者もいるって言うんだよ。でもさ、これって嘘なわけよ。村の収入源は農業と畜産のみで、それも日本で考えるような農業や畜産とはほど遠くて、とてもじゃないけど子ども達にそれほどの教育を与えられる筈がないんだ」

サクラ「じゃ、どうして嘘つくの」

トラ吉「今の生活を変えられたくないっていう保守主義と、あとはまぁ見栄みたいなもんだな。そんなくだらないものの為にあいつらは必死になってんだよ」

サクラ「でもさ、それはそれで幸せに暮らしてるんじゃないの」

トラ吉「そりゃ大人は良いよ。伝統主義に乗っかって偉そうにしてれば良いんだから。今更、大人に物事を効率的に考えろって言っても無理だしね。だからこそ子ども達に教育を与えて考える力を付けさせてやるべきなんだ。考える力が付けば感情論に流されなくなって論理的に物事を考えられるようになる。そうすれば時間はかかるけど子

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

どもたちが大人になる頃には今の状況を変えられるようになる。それなのに頭の硬い大人たちが伝統や風習に囚われて子ども達に教育を受けさせないでいる。そのくせ見栄をはって外の者には教育を受けさせているふりをしてる。戦国時代から脱却する可能性を奪ってるのは伝統や風習に囚われた頭の硬い大人なんだよ。日本にも全体主義に染まって右向け右してる奴いるだろ。アホだろあいつら。民族をひとくくりにして批判している時点で間違いなくアホだろあいつら。あいつら脳みそ無いよ、あってもカニ味噌だよ」

サクラ「相変わらず毒吐きまくりだね」

トラ吉「結局さ、アフリカの人たちは自分で自分の首を絞めてるんだ。自分たちの国を自分たちの手でつくるしかないのにそれができなくなってる。支援団体がアフリカの人たちを助けようとしても伝統や文化が絡んでくるとどうしても手を出せなくなる。学校をつくろうとしても伝統や文化の破壊だと言われればどうしても腰が引けてしまう」

サクラ「八方塞がりだね」

トラ吉「そうなんだよ。アフリカの人たちの意識が少しずつ変わっていくのを信じて待つしかないのかなって思う」

深く頷くサクラ。

サクラ「それでダイヤモンドは？」

トラ吉「ジャッジャッジャーン」

と、効果音をつけながらケースを出し、

トラ吉「パパパパパーン」

と、効果音をつけながらケースの蓋を開ける。

そこには大粒のダイヤが入っている。

サクラ「うわー。それ幾ら？」

トラ吉「五百万位じゃない」

サクラ「すげー」

ダイヤをサクラの手の平に落とすトラ吉。

トラ吉「ダイヤモンドってさ、大規模な鉱山の発見の連続でほんとはもう１００円ショップで買えるくらいのものなんだよ。でもそうなるとダイヤモンド産業が儲からなくなるから、いかに採掘量を減らして流通を制限するかが鍵になってくる。資本主義の基本はいかに楽して儲けるかってことだからね。だからデビアスはかつて９０％の鉱山を独占していたし、その後にどんどん鉱山が発見されて手に負えなくなったらダイヤモンド生産者組合をつくって今では１００％の鉱山を統制してる。その１００％に穴をあけられないかなと思って調べてみたんだけど、そんなことしたら確実に殺され

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

るね。それならそれでせめてそこらへんにゴロゴロ転がってるダイヤの一つくらいでも拝借できないかと思って動いてみたんだけど、それもやっぱり確実に殺されるね。しかしながらですよ。そこはこの天才トラ吉、なにはともあれ天才トラ吉、おっとどっこい天才トラ吉、上手くデビアスの目を誤魔化して持って帰って来たって訳。入国する時が大変でさ、税関に見つからないように尻の穴に隠したんだけど取り出すときにウンコも一緒に出しちゃって、そのウンコがとてつもなく臭くて我ながら何食ってんだと思ったよ」

　ダイヤモンドを手の平から落とすサクラ。

トラ吉「な、何すんだよ」

サクラ「だってウンコじゃん」

トラ吉「これはウンコじゃないから。確かにしばらく匂ってはいたけどウンコじゃないから。ウンコなんてまだいい方だよ。女の運び屋なんてアソコに隠すんだから」

サクラ「そっちの方がまだマシだと思う」

トラ吉「どこがだよ。アソコは人類が誕生する神聖な場所なんだぞ。ダイヤ産んでどうすんだよ」

サクラ「ウンコ出すよりはまだマシだと思う」

トラ吉「ウンコウンコ言うな」

　ダイヤをケースに直してサクラに渡すトラ吉。

トラ吉「これをユキの両親に渡してほしいんだ。事業が上手く行かなくなってユキも入院して、いろいろと面倒をかけてしまったから利子のぶんも含めて返しておきたかったんだ。ず～っと心残りでひっかかってたんだよ。俺からだと受け取ってもらえないからサクラちゃんの方からよろしく頼むよ」

サクラ「わかった。忘れないようにポケットに入れとくね」

　ケースをポケットに入れいるサクラ。

サクラ「ユキちゃん死んでからもうすぐ四年だね」

トラ吉「うん、俺、時々考えるんだ。俺と一緒にならなかったらあいつは幸せになれたんじゃないかって」

サクラ「そんなことないよ。気がついた時には末期の乳ガンだったんだから」

トラ吉「俺が悪かったんだよ。会社がゴタゴタしていたから気がつくのが遅かった。俺が殺したようなもんだ」

サクラ「ユキちゃん、いっつも幸せだって言っていたよ。トラさんといると刺激的で楽しいっていつもそう言ってた。……これ（ポケットを叩く）、ちゃんと渡しとくから安心して」

トラ吉「ありがとう」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

立ち上がってカウンターに行くトラ吉。
コーヒー豆が置かれている棚から、お茶缶と新聞紙を出してくる。
テーブルの上に新聞紙をしき、その上にお茶缶に入っている葉っぱ広げる。
そして、その葉っぱをビニールの小袋に別け始める。
この間、サクラの独白。
若干照明を落として、サクラにサス。
サクラ「私にとってユキちゃんは、かけがえのない、なくてはならない存在だった。私は幼い頃から他人と触れ合うのがとても苦手で一人でいることが多かった。まともに話ができるのは唯一幼馴染のユキちゃんくらいだった。ユキちゃんも他人と触れ合うのが苦手だったが、成長するにつれてまわりに溶け込むようになった。でも私はどうしてもまわりに溶け込めなかった。だからユキちゃんと会う以外は勉強しかしてなかった。同じ高校を卒業した私とユキちゃんは東京大学に入った。そこでトラさんに出会った。トラさんは根っからの企業家で、在学中にもかかわらず輸入雑貨を扱う会社を設立していた。主に海外から安い皮製品を輸入して国内で販売する会社だった。その会社の手伝いをしていたユキちゃんとトラさんが付き合い始めたのは夏休みだった。その年の冬にはユキちゃんの両親の反対を押し切って二人は学生結婚までしてしまった。結婚して幸せそうにしているユキちゃんを見るのが、自分の事のように嬉しかった。ユキちゃんを幸せにしてくれているトラさんとも自然と話ができるようになった。でもそうした幸せは長く続かなかった。会社の売り上げがどんどん落ちていって大量の在庫を抱えはじめた。トラさんの商売方法を模倣したライバル会社が多数現れたのが痛かった。また、これまでがビギナーズラックだったのかもしれない。トラさんは会社の立て直しをはかって革製品とは違うものを売り始めた。それでも好転する気配はなかった。慌ただしく日々を送っていたある日、ユキちゃんが末期の乳ガンだと分かった。それから一ヶ月後にユキちゃんはこの世からいなくなった。心の奥底にぽっかりと穴が空いたようになってなにもやる気が起こらなかった。大学にも行かなくなった。トラさんは在庫を処分して地球を歩く放浪の旅に出てしまった」
照明が戻る。
サクラ「コーヒーショップで大麻ってさ、アムステルダムみたいだね」
ポケットからパイプを取り出すトラ吉。
トラ吉「やる？」
サクラ「いい。でもさ、どうしてアルコールやタバコは合法なのに大麻は違法なんだろうね」
トラ吉「大麻が合法になったら困っちゃうよ。だって儲からなくなるじゃん」
サクラ「なるへそ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

トラ吉「タバコやアルコール程ではないにしても、煙を吸う訳だから大麻にも害があるのは確かだからね。タバコやアルコールでも多くの問題を抱えているのに、わざわざ大麻を合法化して新たな問題を抱えるのは国家戦略としてあり得ないよ。大麻を合法化するとタバコやアルコールが売れなくなる側面もあるしね。つまりさ、合法と違法の線引きって社会の都合なんだよ。たとえば十世紀のヨーロッパではコーヒーは中東から来た悪魔の水って呼ばれて飲んだら死刑だったんだ。それが今じゃ、何処もかしこもカフェカフェだ」

店内の音楽がジャコ・パストリアスの

『ワード・オブ・マウス』に変わっている。

サクラ「……あっ。ジャコだ」

トラ吉「ジャコって？」

サクラ「これ（音楽）。ジャコ・パストリアス。天才ジャズアーティストだよ。ジャズ喫茶やってんのに知らないの？」

トラ吉「俺、コーヒー専門だからさ」

サクラ「なにそれ」

トラ吉「別にいいじゃん。で、ジャコってそんなに凄い奴なの？」

サクラ「凄いもなにも卓越したテクニックと音楽性で革新的なインパクトを与えた天才なんだけどさ、三十五歳の時にナイト・クラブの用心棒とケンカして殴り殺されたんだ」

トラ吉「詳しいね」

サクラ「えへ」

トラ吉「えへって、しかしいくら天才でも殺されたんじゃなー」

サクラ「ねぇ、死体って何で怖いか知ってる？　虫が死んでるの見ても怖くないでしょ。だけど人間の死体は怖いんだよね」

トラ吉「そうだね」

サクラ「人間の死体ってさ、自分自身の死を想像させるから怖いの。死にたくないって気持ちが強いほど恐怖を感じる。だから死ぬ覚悟さえあれば怖くなくなる」

トラ吉「それはなんとなく分かる」

サクラ「トラさんは永遠に生きていたいと思う？」

トラ吉「未来の世界がどうなるか見てみたい気持ちはあるかな」

サクラ「でも永遠に生きるって事はさ、何もかもが終わっても生き続けるってことだよ。愛する人が死んで、人類が絶滅して、全ての生物が死んで、宇宙も破滅して、何もかもが終わった中で自分だけが生きている。そのうち気が狂ってそこにいるだけになる。それでも永遠に生きていたいと思う？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

トラ吉「そうなると難しいな」
サクラ「そうでしょ。人には産まれる自由が与えられてなくて、本人が望もうが望むまいが産まれてしまう。それなのに死ぬ自由は与えられている。どうしてそうなっているのかず～と考えてきた。何かしらの理由があって人には死ぬ自由が与えられている。その何かは身体の苦痛もあるし、精神的な苦痛もあると思う。己の尊厳を保つために死ぬことだってある。他人を守る為、社会を守る為、故郷を守る為に死ぬことだってある。死ぬべき何かがあるから死ぬ自由が与えられている。つまり死ぬのは怖い事じゃないんだよ。むしろ新しく始められる。いったん終わりにして全てをもう一度始められる」
トラ吉「……どこかの宗教に入った？」
サクラ「入ってませ～～～ん。これはいわばサクラ教です」
トラ吉「なるほど。サクラ教ね。うん、おおまかな部分は同意できる。でもそれって輪廻転生の考え方だよね。俺は生まれ変わりって信じてないんだ。生まれ変わりはインドのカースト制度のように身分制度の肯定にもつながるから。俺は死んだら無になってなにもかもなくなると思う」
サクラ「私は生まれ変わると思う。だって皇帝ナポレオンにしてもアメリカ陸軍のパットン将軍にしてもおぼろげながら前世の戦いの記憶が残っていて、記憶の中にある熟練によって連戦連勝ができたって証言してるし、そうとでも考えないと納得できないほどの戦術だって専門家も言っている。まぁそれがほんとかどうかは別にしても私は生まれ変わると思う。ユキちゃんもきっと動物とか虫とかに生まれ変わってトラさんのことを見守ってると思うよ。旅している時に思い当たるようなことなかった」
トラ吉「……そう言われれば、あったな」
サクラ「ほらね。でしょ～。つまり死ぬのは怖い事じゃないんだよ。むしろ新しく始められる。いったん終わりにして全てをもう一度始められる」
ドアにつけている呼び鈴が「カラン・カラン」と響きわたる。
入口にイ・ソンスが現れる。
曲『ピンクのハートでいっぱいよ』。
暗転。

●二場　サクラとケン太
場所：スタジオ高円寺。
音楽にあわせて歌っているサクラ。
ゆっく明転していく。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

『ピンクのハートでいっぱいよ』の歌詞。

♪♪

高原のパステルカラーの駅で同じ電車に乗ったよね。
向かい合った席で視線が重なり合ったよね。
そのとき、ぴっとして、くっときて、
ぱらぱらとピンクのハートがおちてきた。
電車はピンクのハートでいっぱいよ。
あー。ピンクのハートでいっぱいよ。

公園のロココ調のベンチでコーヒーを飲んだよね。
なんとなく笑い合いながら手が触れたよね。
そのとき、ぴっとして、くっときて、
ばらばらとピンクのハートがおちてきた。
公園はピンクのハートでいっぱいよ。
あー。ピンクのハートでいっぱいよ。

霧雨のふる歩道でつまらない喧嘩をしちゃったよね。
なんだか私の天気は乙女模様だったよね。
そのとき、抱きしめられて、みつめられて、
ばさばさとピンクのハートがおちてきた。
歩道はピンクのピンクのハートでいっぱいよ。
あー。ピンクのピンクのハートでいっぱいよ。

私がこんなふうになってしまうのは、あなたが大好きだからなの。
ちょっぴりお茶目な私を、いつまでも抱きしめていてね。
あー。ピンクのハートでいっぱいよ。
あー。ピンクのハートでいっぱいよ。

サクラが歌っていると、ケン太がスタジオにそーっと入ってくる。
サクラの姿を優しい目で見つめるケン太。
そして歌が終ると大きく拍手をする。
サクラ「あっケンさん、おはよう御座います（礼儀正しく）」
ケン太「おはよう御座います（礼儀正しく）いやー悪い悪い。ちょっと活動が長引いちゃってな」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「今日も企業の不正を正してたんですか」
ケン太「あぁ、街宣車でガンガンとっちめてやったぞ。金ってのは性根が腐った奴の所に集まるんだ。既得権益にまみれた奴らは悪の塊だからな」
サクラ「まったくもってそうですね」
そう言って腹筋をはじめるサクラ。
ケン太「相変わらず熱心だな」
サクラ「ツアーもうすぐなんで頑張らないと」
ケン太「うん……カッパは？」
サクラ「カッパはバイトで遅れるそうです」
ケン太「そう……（小声で怒鳴る）あのやろー！」
サクラ「どうしたんですか？」
ケン太「んん、なに、ちょっとミーティングをしようと思ってたんでな」
机の上にはアイフォンがスピーカーに繋がれて置いてある。
そのアイフォンをみつめるケン太。
ケン太「これは？」
サクラ「私のです。かけてもらえますか」
ケン太「おう」
アイフォンが何なのか分からないので、そのままハンガーに掛けるケン太。
以後、ハンガーにアイフォンが掛けてある。ただそれだけ。
ケン太「なあサクラ」
サクラ「はい」
ケン太「カッパと一緒に話そうと思ったんだがな」
サクラ「はい」
ケン太「その……ピンクのハートでいっぱいよ……もう練習しなくていいぞ」
サクラ「はい？」
ケン太「だから……ピンクのハートでいっぱいよ……は、もう練習しなくていい」
サクラ「はい？」
ケン太「今度のツアーな……中止だ」
サクラ「ちゅ、中止？」
ケン太「今度のツアーな……中止だ」
サクラ「ど、どうしてですか？」
ケン太「CD売れてないだろ」
サクラ「売れてます。メチャメチャ売れてます。一千枚以上売れてます」
ケン太「あぁ確かに売れてる。お前のまわりでは異常に売れてる。一千枚のうち九百八

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

十枚がお前の売上だ。みんなビックリしている。関係者みんながビックリしている。サラリーマンなら棒グラフが突き抜けて営業成績ナンバーワンだ」
サクラ「ナンバーワンです」
ケン太「でもなぁサクラ、一人で驚愕のセールスを叩きだしても仕方ないんだよ」
サクラ「ナンバーワンなのにどうしてですか？」
ケン太「カッパに聞いたぞ。サクラは昼も夜も寝ないでバイトしているって。部屋をCDで埋めるんだといって昼も夜もバイトしてるって」
サクラ「カッパめ、こんど皿割ってやる」
ケン太「そんな無理をしてたらそのうち体壊すぞ」
サクラ「ケンさん、私、寝なくても平気なんです。むしろ寝ないほうが調子が良いくらいです。だから寝る場所も無いくらいに部屋をCDで埋めつくすんです。こうなったら部屋に入れないほどCDで埋め尽くしてやるんです」
ケン太「部屋に入れないとダメじゃないか」
サクラ「玄関で寝ればいいじゃないですか。それくらい私は今回のツアーにかけているんですよ！」
ケン太「それは痛いほどわかる！」
サクラ「だったら中止なんて言わないでください！」
ケン太「事務所のタヌキ社長がな、今回はツッパリ桃太郎を使うからって」
サクラ「どうしてツッパリ桃太郎なんですか」
ケン太「ツッパッテルからだろ」
サクラ「じゃーなんですか。ツッパッテれば良いんですか。ツッパリの格好して歌ってればそれで良いんですか」
ケン太「サクラ、CDが売れる三大要素って知ってるか？」
サクラ「いえ」
ケン太「CDが売れるには第一にポジティブソングかラブソングであること。第二に誰でも演奏できる単純なコード進行。そして第三に見た目だ。つまり売れるには音楽のレベルを落としてビジュアルを重視しないとダメなんだ。ツッパリ桃太郎のモモちゃん可愛いだろ」
サクラ「確かにモモちゃんは可愛いです」
ケン太「モモちゃんて彼氏とかいるの？」
サクラ「さあ」
ケン太「噂とか知らない？」
サクラ「いえ」
ケン太「今度調べといて」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「はあ」
ケン太「でもいたらショックだよな。いるのかいないのか知らないから平常心でモモちゃんと話ができるのに、もしいるとなると寝こんじゃうかもな。……でもいるよな、あんな可愛んだもん。いるよな。……だが自分で可能性の扉を閉めてはダメじゃないか。……いやいるよ。いない方がおかしいもん。……んー、しかしなー。……いる、いる、間違いなくいる。……でもなー」
サクラ「ケンさん、苦悩しいている所に申し訳ないんですけど、モモちゃんの可愛さは全て計算ですよ。モモちゃんは男の人から可愛いと思われるように演技をしているんです。私と話してる時は命令口調ですし、この間も蹴りいれられました。イヌ君とキジ君とちょっと話をしただけなのに調子こいてんじゃねーよって蹴られたんです。そんな女をどう思いますか？」
ケン太「俺も蹴られたい」
サクラ「違います。ケンさん、人の話を聞いて下さい」
ケン太「はい」
サクラ「あの女は、もうこの際あの女と言わせてください。あの女は男の人から好きな人がいるんだと相談されると自分の事だと思う女です。自分のまわりにいる男は全て自分の事を好きだと思う女なんです。そんな女をどう思いますか？」
ケン太「察しがいい」
サクラ「違います。ちゃんと人の話を理解して下さい」
ケン太「はい」
サクラ「いいですか、あのアマは、もうこの際あのアマと言わせてください。あのアマやりまくってるんですよ。清純そうな顔を武器に毎日男をとっかえひっかえやりまくってるんですよ。そんなアマをどう思いますか？」
ケン太「素もぐりが得意？（良く分かってない）」
サクラ「あっ！　さてはあのアマ～～。きっとそうだ。きっとタヌキ社長と寝たんだ。タヌキ社長とファックしやがったんだ。こましやがったんだ～～～」
　悔しがるサクラ。
ケン太「……なぁサクラ、俺最近考えるんだ。夢って何時まで見たら良いのかなって。確かに俺には才能がある。溢れんばかりの才能だ。むしろ俺自身が才能みたいなものだ」
サクラ「まったくもってそうです」
ケン太「だがな、サクラ。この業界はコネがないと構造的に成功出来ない仕組みになってる。コネがないと未熟だといった先入観でどうしても見られてしまう。そして俺にはコネがまったくないんだ。そこでだ。……あのな……そのーだな……絶対革命団は

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

本日をもって解散します！」
サクラ「解散なんて冗談じゃないです！」
ケン太「限界なんだよ、なにもかもが！」
サクラ「なにを弱気になってんですか！」
ケン太「じゃあ、ピンクのハトがいっぱいよ、どう思う」
サクラ「ピンクのハートでいっぱいよ、ですよね。とても良い曲だと思います」
ケン太「本当にそう思うか？」
サクラ「はい」
ケン太「本当に、ピンクのハトはおっぱいよ、良い曲だと思うか」
サクラ「ピンクのハートでいっぱいよ、ですね。ピンクのハートでいっぱいよ、はとても良い曲だと思います」
ケン太「何が良いもんか。あんな歌売れるわけ無いだろ。売れてたまるか！」
悔しがるケン太。
サクラ「ケンさん、私は分かってます。分かってるんです。ピンクのハートでいっぱいよは絶対革命団が売れる為に、ケンさんが自分を偽りながら必死に作った曲だって分かってるんです。カッパはシラけていましたが、私にはケンさんの気持ちが痛いほど分かったから頑張って練習してきました。今のケンさんは自分の才能を抑える為にパワーをセーブするカメの甲羅のような物を背負っている。つまりケンさんは亀仙人です。亀仙人になってまで、信念を曲げてまで勝負をかけた歌で、いきなりつまずいてしまって弱気になるのも分かるんです。でもね、ケンさん、覚えてますか？　私、過食と拒食を繰り返してて、生きるのが辛くて辛くて、自殺するつもりで函館湾に入水しましたよね。函館の凍結した海に入ると眠る様に死ねるって聞いたから、……でも死ねなかった」
ケン太「夏真っ盛りだったからな」
サクラ「泳ぎ疲れて死ぬほど眠れました。さすがに眠り疲れて浜辺をブラブラしていたら反資本主義集会に来ていたケンさんに集会参加を勧められて、そのあと事情を知ったケンさんにこっぴどく説教されました。そのケンさんの説教は話そのものが長くて、最後にはケンさんのつくった自慢のポエムまで紹介されて、正直、死ぬかと思うような説教でした」
ケン太「でもそれで自殺を思いとどまったんだよな」
サクラ「いえ、次に考えたのが服毒自殺です。農薬での服毒自殺は一気に死ねるって聞いたから。農家に行って致死量分の農薬を分けて下さいって頼んだんです。しかし分けてもらえませんでした。信じられませんでした。たくさん分けてくれって頼んだのなら分かります。致死量分だけ分けてくれって頼んでいるのに分けてくれないんです。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

私言いました。じゃー分けてくれなくても良いですから牛乳だと偽って飲ませて下さいって。でもそれだと自殺じゃなくて他殺になるからもっとダメだって。言っている意味が分かりませんでした。じゃー青酸ソーダでも良いですって頼んでもダメでした。仕方が無いので自動販売機でカルピスソーダを飲みました」

ケン太「突っ込みどころ満載だが、自殺を考える人間の精神状態は得てしてそういったものなのかもしれないな。俺は農家の人がサクラに農薬を渡さなかったことに感謝したい。よくぞサクラの言葉の真意をくみ取ってくれた。もしこれが他人に干渉しない現代社会の薄汚れた農家だったらサクラは死んでいた。現代社会の薄汚れた農家ってのが良く分からんがほっといてくれ。それで自殺を思いとどまったんだな」

サクラ「いえ、次に考えたのがガス自殺です。ガス自殺は夢を見るように死ねるって聞いたから」

ケン太「それは誰に聞いてるんだ？」

サクラ「でも、ガスだと爆発したらまわりの人に迷惑がかかります。私は人に迷惑をかけてまで死にたくありません。だからガスの代わりに電気を付けっぱなしにしてみたんです。電気炊飯器も、電気カーペットも、電気鍋も、ダイアナ妃の伝記も、電気と言う電気は全て付けっぱなしにしてみたんです。そうしたら室内の温度が若干上がりました。そんなんで死ねる訳がありません。自分でも分かってます。ダイアナ妃の伝記なんて意味が分かりません。それほど私は追い詰められていたんです。そんな時、函館でケンさんに頂いた絶対革命団のＬＩＶＥチケットを見つけました。正常であれば行きませんが、追い詰められていた私はＬＩＶＥ会場へと向かいました。あのＬＩＶＥという名の生演奏を、あの衝撃と言う名のショックを、私は一生忘れることはできないでしょう。そこにいたケンさんは狂ったようにステージ上でつぶやいていました。それが音楽なのかお経なのか判別がつかないほどつぶやいていました。ただひたすらステージ上で音楽に合わせてつぶやいていました。耳をすませてみると、こんなことを言っていました。皆殺しーフフフフフフー。ぶっ殺すーフフフフフフー。テメエラ皆殺しーフフフフフフー。殺されないだけ有難いと思えフフフフフフー。くたばるのはお前の方さフフフフフフー。逃げられると思うなよフフフフフフー。あっ間違えた、ひとつ飛ばしたフフフフフフー。ってな感じです。それが歌だと分かるのにかなりの時間がかかりました。私はケンさんの歌を聞いて、こりゃ狂っている、とち狂っている、そう感じました。すると可笑しくて可笑しくて、こんなんで良いのか、世の中こんな好い加減で良いのか、いやダメだろう、でもこれで良いのかもしれない、こんなんで良いのかもしれない、そう思えたんです。あのＬＩＶＥはまさしく衝撃と言う名のショックでした。魔法と言う名のマジックでした。奇跡と言う名のミラクルでした。そうです。私を立ち直らせてくれたのはケンさんの音楽なんです。私を救っ

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

てくれた絶対革命団は私の命そのものなんです。だからお願いします。ツアーの件は忘れましょう。最初からそんな話は無かった事にしましょう。ケンさんにはケンさんにしかつくれない音楽があるんです。売れなくても良いじゃないですか。それにカッパだって納得しませんよ。カッパとも絶対革命団の将来について語り合っています。相撲を取りながら、一緒にキュウリを食べながら、ケンさんを支えて行こうと誓い合っています。だから解散なんてカッパだって納得しませんよ。カッパも絶対革命団に賭けてるんです。だから頑張りましょう」

ケン太「じつは解散はカッパが言い出したんだ。そろそろ終わりにしたらどうかってカッパに言われたんだ」

サクラ「マ、マジっすか？」

ケン太「おおマジだ。一緒にサクラを説得する約束だったのに、カッパは逃げやがった。カッパの癖に汚い奴だ。カッパの風上にも置けねえ」

サクラ「カッパはずる賢かったですからね。ぶっちゃけ、カッパはやらしい雰囲気が漂っていました。だから何時か裏切るのではないかと薄々感じていました」

ケン太「カッパはしょせんカッパだな」

サクラ「カッパエビセンです」

ケン太「どうせツッパリ三蔵法師とか言うバンドをつくるつもりだろう」

サクラ「カッパの考えそうな事ですね」

ケン太「すまなかったな。弱気になってすまなかった。よっし、こうなったら新曲をつくってやる。誰もが引いて引いて引きまくる、とんでもない新曲をつくってやる」

サクラ「あ～良かった～。ほんとうに良かった～。はい。私もボーカル頑張ります。あのタヌキ社長をギャフンと言わせてやります」

ケン太「うん、ギャフンと言わせよう」

サクラ「文字通りギャフンです」

ケン太「おう、ギャフンだ」

サクラ「ギャフンです」

嬉しさのあまり顔がグチャグチャのサクラ。

暗転。

曲『アフリカちっくなJAZZ』。

●三場　トラ吉とソンス

場所：取調室。

曲はそのまま流れている。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンスとトラ吉が机を挟んでイスに座っている。
ふてくされた格好でイスにもたれ掛っているトラ吉。
トラ吉を注意深く観察しているイ・ソンス。
ソンスの独白。
ソンス「アフリカの中央に位置するコンゴ民主共和国。かつてザイールと呼ばれていたこの国は十九世紀後半に西洋列強に浸食された。それからというもの様々な勢力によって戦闘が繰り広げられており、混乱の連鎖が今もなお続いている。日本の外務省が退避を勧告し、渡航の延期を警告している危険な国である。それにもかかわらずトラ吉はコンゴ民主共和国の土を踏んだ。ダイヤモンド鉱山に興味を持ったのが切っ掛けだった。しかしその治安の悪さからこれといったダイヤモンド鉱山に辿り着けなかった。そこで一旦、コンゴ国際空港から韓国の仁川国際空港に引き上げようとしていた。そのコンゴ国際空港の出国審査でトラ吉は審査官に拘束された。私がトラ吉に会ったのはその一時間後だった」
涼しい表情でダイヤモンドの原石を見つめるソンス。
そのダイヤを机に置く。
次にパスポートを手に取って笑顔で話しかける。
ソンス「写真より少し太っているかな？　いやね、証明写真ってのは酷いのになると別人に見えるからね」
トラ吉「……」
ソンス「私はイ・ソンス。アメリカの諜報機関の者だ。両親が在日朝鮮人でね、中学まで日本で育った。担当が極東なので日本にもよく行く。君は三年も外国暮らしだろ。政治でもスポーツでも日本の事でなにか知りたいことがあったら教えるよ」
トラ吉「……」
ソンス「そうだな。日本の北朝鮮に対する報道は面白いな。一部を切り取ってそれがまるで全てであるかのような報道をしている。金一族は人民の飢餓を利用して援助金を獲得し、その金で豪勢な暮らしをしている。歯向かう者は世界最大の強制収容所でなぶり殺しだ。現地でろくに取材もせずによくそのような報道ができるものだ」
トラ吉「……」
立ち上がるソンス。
カバンから本を取り出して机の上に置く。
ソンス「この国の刑法だ。読んでおくといい」
トラ吉「いらねえよ」
本を払いのけるトラ吉。
本を拾うソンス。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

また机に置く。
ソンス「読んでおいた方が良い。自分の置かれている状況が分かる」
トラ吉「ＣＩＡが何の用だ？」
ソンス「absolute Genius って組織を知ってるか」
トラ吉「知らねえな」
ソンス「日本での通称は１０３１だ。最近になって急激に力を付けて来たアジアの密輸組織で、ダイヤ・銃・麻薬といった様々な物を密輸し販売している」
トラ吉「日本大使館に連絡してくれ」
ソンス「……」
トラ吉「聞こえないのか？　アンタじゃなく、日本大使館の人を呼んでくれ」
ソンス「呼んでどうするつもりだ？」
トラ吉「助けてもらう」
ソンス「それは無理だ。逆を考えれば理解できる。もし日本で外国人が捕まって、他国の政府が干渉してきたら日本人の反感を買うだろ。コンゴで捕まったのだからコンゴの刑法に従うのが国際社会のルールだ。日本政府は見て見ぬふりをし、マスコミも報道規制をかける。日本政府が国際ルールを無視して一人の日本人のために動くと思うか。海外で拘束されている日本人が何人いると思ってる。つまり海外でのトラブルは自己責任だ。この国で捕まったのだからこの国のルールに従うしかない。だから刑法を読めと薦めている」
トラ吉「ルールもへったくれもあるか」
ソンス「（ダイヤを指し）これは何だ？」
トラ吉「……」
ソンス「しかもこれは盗品だぞ」
トラ吉「だからタクシーの運転手に頼まれたんだ」
ソンス「運び屋をしろとか？」
トラ吉「娘さんに渡してくれって頼まれた。一日も休まずに仕事をして大学まで行かせた自慢の娘が韓国の仁川国際空港に勤めていて、その娘から最近連絡が無くて心配だからこの包みを空港の職員に渡してくれって頼まれた。娘には多くの友人がいるので渡してくれれば娘に届けてくれる筈だって」
ソンス「中身は確認しなかったのか？」
トラ吉「確認した。現金が無いので原石くらいしか渡せるものがないってその運転手は言ってた。渡さないで俺が頂いてしまうかもしれないよって言ったら、あんたは信用できるから大丈夫だって言われた。俺は渡すだけならと思って包みを受け取ったんだ。同じことを何度も言わせるなよ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンス「ダイヤモンドの国外持ち出しは禁止されている」
トラ吉「知らなかった」
ソンス「嘘をつくな！」
トラ吉「俺はハメられたんだ！」
ソンス「この国の人たちは誰も信じないぞ！」
トラ吉「この国の人たち？　この国の人たちじゃないだろ。信じないのはお前たちだろ。ダイヤなんてそこらへんに転がっている石ころだ。幾らでもある石ころを独占することで既得権益化しているだけだろ。この国の刑法？　笑わせるな。ダイヤモンドの国外持ち出し禁止はデビアスがつくった法律だ。先進国の虫食い企業が利権を守ろうとしてアフリカを食い物にするから国内がいつまでたっても混乱している。子ども達に教育を与えてやればアフリカは良くなるのに、それをさせないようにしているのはお前たちだろ。違うか？」
ソンス「君が自由に発言するのは当然の権利だ。ただし今はそれよりも君のことだ。話を元に戻そう。このままだと間違いなく１０年は刑務所から出られない。それが現実だ。たとえば１９９２年のメルボルン事件がある。メルボルン空港で日本人観光客四人が捕まった。持っていたスーツケースから約１３キログラムのヘロインが発見されたからだ。そのスーツケースは四人のスーツケースが盗まれたので、ツアーガイドからプレゼントされたものだった。しかし裁判ではそれが嘘の証言であるとして懲役１５年の実刑判決が下された。こんな話もある。１９７０年にトルコでアメリカ人の青年がハシシの不法所持で逮捕された。その青年は軽い気持ちで2キロのハシシを国外に持ち出そうとしていた。当時のアメリカはトルコと仲が悪かった。そのため逮捕された青年は重罪人として扱われて過酷な強制労働を強いられた。これはミッドナイト・エクスプレスの題名で映画化もされたから有名な話だ。君の置かれている状況もこれらの話とよく似ている」
　出て行こうとするトラ吉。
ソンス「待てよ」
トラ吉「日本政府もマスコミも誰も助けてくれないんだろ」
ソンス「あぁ、そうだ」
トラ吉「それならこれ以上の話し合いは無駄だ。刑務所でも何処でも連れて行け。後は裁判所で話す」
ソンス「勝てると思っているのか？」
トラ吉「さあな、それでも俺は俺なりに最後まで抵抗してやる。この本は頂いとくよ」
　本を取ろうと手を伸ばすトラ吉。
　素早く本を押さえるソンス。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンス「私は君を助けたいと思っている」
トラ吉「日本政府が助けられないのにお前が助けられるのか」
ソンス「政府では無く私だから助けられるんだ。面白い話をしてやろう。ＴＶでよくやっている刑事ドラマだが、あれは真犯人が捕まってもほとんど無罪になる。何故だか分かるか」
トラ吉「……いや」
ソンス「証拠が無いんだよ。ほとんどの事件が自白によって解決している。裁判で優秀な弁護士を雇って証言を覆せば無罪になる」
トラ吉「……」
ソンス「このダイヤを君は持っていなかった」
トラ吉「……見返りは何だ。金か？」
ソンス「金など要らないよ。金ではなくて心だ。私は日本にお世話になった人間だからね」
トラ吉「胡散臭いな」
ソンス「（笑）確かにそうだな。正直に話そう。中東を経由してアフリカを歩きまわっている君をＣＩＡは不審に思い調べている。しかしテロ組織などに関わっている様子がなかったため、既に重要人物リストから外されている。私はその報告書に目を通して君のことを知った。その報告書にはこう記載されていた。従順ならざる日本人、とね。今回、君と話をしてその報告書の意味がなんとなく分かった。弱者の立場でありながら強気の姿勢を崩さない君の精神力に感心したよ。そこで司法取引をしたいんだ。最近、１０３１と呼ばれている組織がアジアの密輸グループとして急激に力を付けている。奴らはダイヤ、銃、麻薬などをアジア各地で密輸し販売している。私はその１０３１を追ってアフリカまでやって来た。君に盗品のダイヤを預けたのもそいつらだ。１０３１は敗戦時に旧日本軍が隠した毒ガス弾を見つけたと言って日本政府をゆすっている。これが公になると韓国や中国とのあいだに国際摩擦が起こる。そこで日本政府は秘密裏にＣＩＡに捜査を依頼した。この捜査がちょっとやっかいで君に協力してほしいんだ」
トラ吉「何をすればいい」
ソンス「１０３１に潜入してもらいたい」
トラ吉「……スパイか？」
ソンス「君は運が良い。私がこの捜査の担当だったから助かるんだ」
微笑みを浮かべて立ち上がるソンス。
トラ吉に片手を差し出して握手を求める。
ソンス「よろしく」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

微笑みを浮かべて立ちあがるトラ吉。
差しだされたソンスの手を払うトラ吉。
トラ吉「……やなこった」
暗転。
曲『一場で流れていたＪＡＺＺ』。

●四場　トラ吉とサクラの続き
場所：ジャズ喫茶ＹＯＫＯＴＡ。
一場の続き。
サクラのセリフの途中で明転。
サクラ「私は生まれ変わると思う。だって皇帝ナポレオンにしてもアメリカ陸軍のパットン将軍にしてもおぼろげながら前世の戦いの記憶が残っていて、記憶の中にある熟練によって連戦連勝ができたって証言してるし、そうとでも考えないと納得できないほどの戦術だって専門家も言っている。まぁそれがほんとかどうかは別にしても私は生まれ変わると思う。ユキちゃんもきっと動物とか虫とかに生まれ変わってトラさんのことを見守ってると思うよ。旅している時に思い当たるようなことなかった」
トラ吉「……そう言われれば、あったな」
サクラ「ほらね。でしょ～。つまり死ぬのは怖い事じゃないんだよ。むしろ新しく始められる。いったん終わりにして全てをもう一度始められる」
ドアにつけている呼び鈴が「カラン・カラン」と響きわたる。
入口に現れるイ・ソンス。
トラ吉「いらっしゃいませ」
ソンス「コーヒー」
トラ吉「はい」
椅子に座るソンス。
注意深くサクラの様子を観察する。
ソンスの視線に気持ち悪さを感じるサクラ。
素早く新聞を丸めて大麻を片付けるトラ吉。
目線をサクラに向けるソンス。
違うといった感じで首を振るトラ吉。
安堵するソンス。
目線をトラ吉に向けたあと、サクラに向ける。
頷くトラ吉。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラのテーブルへと向かう。
ソンスの視線に耐えられず帰り支度をしているサクラ。
やってきたトラ吉に耳うちする。
サクラ「(小声で) そろそろ帰るね。トラさん、ごちそうさま」
トラ吉「(小声で) ウンコたのんだよ」
サクラ「(小声で) 任せといて」
トラ吉「有難うございました」
ドアにつけている呼び鈴が「カラン・カラン」と響きわたる。
ソンス「知り合いか？」
トラ吉「大学時代の後輩だ」
ソンス「仕事の事はしゃべってないだろうな」
トラ吉「もちろん」
ソンス「ならいい」
席を立ち、窓から外の様子を確認するソンス。
ソンス「白いヘルメットをかぶった女の子だな」
トラ吉「そろそろ来る」
ソンス「受取人はどうなってる」
トラ吉「横田組ってヤクザにしておいた。入金も済ませてある」
ソンス「来たら手はず通りに頼む」
トラ吉「わかった」
ソンス「ところで毒ガス弾の情報は掴めそうか？」
トラ吉「それがどうもおかしい。噂が全くないんだ。見つけたってのは嘘じゃないか」
ソンス「日本政府に一本送られて来た。見つけたのは確かだ」
トラ吉「だからって１０３１の仕業だとは限らないだろう。１０３１の名を語っている可能性もある」
ソンス「１０３１にはテロ組織も一枚噛んでいる。お前が考えているほど甘い組織じゃない」
トラ吉「そういえば幹部のなかにテロ組織のアル・ザワヒリがいたな」
ソンス「(笑顔) そうか。ハンバリー法学派のアル・ザワヒリもいたか。こりゃ上手くいけば三階級昇進だ。もう現場で動かなくて良くなる」
トラ吉「あのさ、正直なところ俺たちだけで尻尾を掴めるような相手じゃないよ。日本政府とも連携して捜査するべきなんじゃないかな」
ソンス「日本で育った俺がどうして日本国籍を捨てたと思う。在日は日本人じゃないんだよ。日本政府なんかと連携してたまるか」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

トラ吉「それはあんたの感情的な問題だろ。国家機密だからって勝手に暴走しすぎじゃないか。このまま二人で強引に捜査を進めるなら俺は降りるぞ」
ソンス「あのダイヤはどうした？」
トラ吉「……」
ソンス「アフリカで交換条件にやったダイヤだよ。売ったか？」
トラ吉「……」
ソンス「降りるなんて虫が良すぎるぞ」
トラ吉「無理なものは無理だ」
ソンス「面白い話をしてやろう。シューズメーカーが二社、アフリカに市場調査にやってきた。先にやってきた調査員は、誰も靴を履いていないから靴は売れませんと本社に報告した。次にやってきた調査員は、誰も靴を履いていないから幾らでも靴が売れますと報告した。大切なのは考え方だ。世の中は考え方次第でどうにでもなる」
トラ吉「その結果、靴は売れませんでしたってオチだろ」
ソンス「その通りだ。売れるかどうかは別の問題だ。しかし人は困難にぶち当たったときに困難を乗り越える方法を考える奴と、困難から逃れる理由を考える奴がいる。俺はどんな困難でも乗り越えてみせる。お前だってそうだろ。だからこそお前を助けたんだ。無理だと思うな。粘っていれば必ずなんとかなる」

外の様子をみるソンス。

トラ吉の独白。

トラ吉「イ・ソンスは幼い頃から勉学、スポーツ供に優秀で自尊心の強い子どもだった。その自尊心を打ち砕いたのが高校受験の失敗だった。その失敗が在日であることによるものなのか、単純に学力不足によるものなのかわからなかった。ただし、ソンスのなかで祖国への思いが大きく膨らんだのは間違いなかった。ソンスは両親の反対を押し切って韓国の高校に入学した。それと同時に永山鉄男の日本名を捨てた。その韓国でソンスは更なる挫折を味わった。在日は韓国人として扱ってもらえなかった。その挫折が良かったのか悪かったのか、負けん気の強いソンスは猛勉強をしてアメリカのハーバード大学に入った。その後、ソンスの祖国への思いは北朝鮮へ向けられるようになる。大学を卒業したソンスは中国から北朝鮮に渡って朝鮮労働党の主要ポストに就いている。日本、韓国、アメリカに精通しているソンスは北朝鮮にとって貴重な存在だった。次第に北朝鮮の歯車として覚せい剤の販売と偽造紙幣浄化の仕事に携わるようになる。北朝鮮での生活も三年が過ぎたころ、ソンスは香港でＣＩＡに拘束された。そして一年後にはソンス自身がＣＩＡになっていた。どうにか手を尽くして調べたイ・ソンスの経歴はここまでだ。もしかすると北朝鮮滞在時から既にＣＩＡとして内情を探っていたのかもしれない。そこらへんの真相は俺にも分からなかった」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

バイクのエンジン音が聞こえる。
視線を合わせるトラ吉とソンス。
二人は通常の営業風景を演出する。
ドアにつけている呼び鈴が「カラン・カラン」と響きわたる。
白いヘルメット（半キャップ）をかぶったまま入ってくる二木田。
背中には安物の黒いリュックを背負っている。
二木田「いやー、道コミコミだわ」
トラ吉「いらっしゃいませ」
二木田「とりあえずヒーコー下さい」
トラ吉「はい。こちらの席にどうぞ」
予め決めていた席に案内するトラ吉。
リュックを隣の席に置く二木田。
フードメニューを見ながら鼻歌まじり。
視線を合わせるトラ吉とソンス。
レジに掛けてある鍵を手に取るトラ吉。
出入り口まで来て、ドアにつけている呼び鈴を手で押さえる。
そしてそのまま店から出て行く。
席を立つソンス。
二木田の正面に座る。
ソンスを見て鼻歌が止まる二木田。
二木田の表情を確認するソンス。
次にリュックを注意深く見る。
二木田もソンスを注意深く見ている。
二木田「すみません、無理です」
ソンス「ん？」
二木田「ナンパですよね。無理です」
ソンス「リュックの中を見せてください」
二木田「もしかして変態ですか。もっと無理です」
ソンス「見せないと被疑者として署まで同行願います」
二木田「……」
ソンス「リュックの中を見せてください」
二木田「容疑は何ですか？」
ソンス「中を見れば分かる」
二木田「容疑も教えて貰えないのに嫌です」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

リュックを強引に奪い取るソンス。
二木田「それ預かり物なんですから勝手なことしないでください」
何も言わずチャックをあけるソンス。
リュックから新聞紙に包まれた物を取り出す。
それを机に置いていく。
二木田「これはイモですか？」
新聞紙を広げるソンス。
その中身は拳銃である。
二木田「これはおもちゃですね」
ソンス「本物だ。2、3、4、5、6、全部で六個だ。君には黙秘する権利と弁護士を自由に選択する権利がある。さて、本人確認書類を見せてくれ」
二木田「容疑も教えて貰えないのに嫌です」
ソンス「立派な銃刀法違反だ。本人確認書類を見せてくれ」
二木田「私はただのバイク便ですよ」
ソンス「いいか、君の持っていたリュックから銃が出てきた。これはフィリピンから台湾ルートで日本に密輸された銃だ」
二木田「そんなの知りません」
ソンス「知らなかったにせよ、立派な銃刀法違反だ。しかもヤクザに銃を渡そうとしていた。捜査に協力しないと面倒な事になる」
二木田「脅し捜査ですね」
ソンス「脅し捜査とは違う」
二木田「それではハンコを本人確認書類として提出します。契約書とかハンコが一番重要ですからね」
ソンス「車の免許証を出せ」
二木田「車の免許証は持っていません」
ソンス「バイクに乗っていただろ」
二木田「でも車の免許証は持ってないんです」
ソンス「銃刀法違反に無免許運転か」
二木田「無免許じゃありません。原付免許を持っていますから」
ソンス「それなら原付免許を見せてくれ」
二木田「手抜き捜査でしたね」
ソンス「手抜き捜査とは違う」
二木田「それならこうしましょう。貴方の原付免許を見せてくれたら私も見せます」
ソンス「原付免許は持ってないから見せられないな」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

二木田「えっ、原付免許も持ってないって警察の癖におかしくないですか」
ソンス「おかしくないよ。普通免許に原付も含まれているからね」
二木田「えっ、マジっすか。それってお得じゃないですか。是非そのお得な免許証を見せてくださいよ。おねがいしますよ。あっ、でもダメだ。私、普通免許を持ってないからダメだ。原付免許しかもってないから普通免許を見られないや」
ソンス「見るだけなら大丈夫だ。ほら（免許証を差し出す）」
二木田「えっ、教習所に通わなくていいんですか？」
ソンス「いいからさっさと見て、さっさとお前も見せろ」
免許証を受け取る二木田。
二木田「おとり捜査ですね」
ソンス「おとり捜査とは違う」
立ちあがって音源があるレジまで行くソンス。
そして店内に流れているジャズを消す。
免許証を見ている二木田。
二木田「イ・ソンス、10月2日産まれ。10月2日。トーフじゃん。トーフ。プッ！」
トーフがツボだったらしく、笑いが止まらない。
免許証を回収するソンス。
ソンス「それでは君のを見せてくれ」
ヘルメットを外して、ヘルメットを大きく振ってみる二木田。
二木田「あれ、おかしいな。確か此処にあったのにな」
ヘルメットを叩いてみる。
二木田「あれ、おかしいな。確か此処にあったのにな」
ソンス「持ってないんだな」
二木田「あっそうだ。バイクだ。バイクに忘れてきた」
出入り口へ向かう二木田。
しかしドアは固く閉ざされている。
ソンス「逃げられると困るんでね」
二木田「あーあ、せっかくバイクにあるのにな」
ソンス「好い加減にしろ！」
二木田「はいはい。持っていませんよ。持ってなくて何がいけないんですか。持っていないのがそれほど悪い事なんですか。じゃー何ですか、持っていると偉くて持っていないと偉くないんですか」
ソンス「ちょっと落ち着け」
二木田「ちょっとお乳突け？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンスの乳を突こうとして躊躇する二木田。
二木田「嫌です。さてはセクハラ・ハラスメントですね」
ソンス「セクハラでセクシャル・ハラスメントだ。セクハラ・ハラスメントだとセクシャル・ハラスメント・ハラスメントになる」
二木田「まぁ、落ち着いて下さい」
ソンス「私は落ち着いてる」
二木田「じゃあ、こうしましょう。私が此処でコーヒーを飲んでいたら貴方がバイクに乗って免許証を持ってきた。それか私がバイクを飲んでいたら貴方がコーヒーに乗って免許証を持ってきた。または免許証がコーヒーを飲んでいたら貴方を持ってきた」
ソンス「話が錯乱してるぞ。覚せい剤でもやってるのか」
二木田「覚せい剤なんてやってませんよ。誤認逮捕ですね」
ソンス「誤認逮捕とは違う。これ（拳銃）はなんだ？」
二木田「そんなもん、ただの拳銃じゃないですか」
ソンス「……」
二木田「もしかしてワラビモチですか？」
ソンス「拳銃だ」
二木田「ビックリさせないで下さい。ワラビモチかと思うじゃないですか」
ソンス「だいぶ読めてきたぞ。君は日本人じゃないだろ。言葉の解釈がおかしかったり、身分証がなかったりするのはそのためだ。さては密入国だな」
二木田「密入国違うアルよ。日本人に決まっているアルよ。なに言っているアルか」
ソンス「銃刀法違反に無免許運転。そして密入国。このままだと少なくとも五年は刑務所暮らしになる」
二木田「納得いきません。帰らせてください」
ソンス「帰りたいか？」
二木田「もちろん帰りたいにきまってるアルよ」
ソンス「じつは君を助けたいと思っている」
二木田「是非お願いしますアルよ」
ソンス「君は人が良さそうだから騙されたんだろう」
二木田「そうなんです。くそー」
ソンス「そこでどうするかだ」
二木田「それを考えてください」
ソンス「absolute Genius って組織を知ってるか」
二木田「知ってると偉いんですか」
ソンス「日本での通称は１０３１だ。最近になって急激に力を付けて来たアジアの密輸

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

組織で、ダイヤ・銃・麻薬といった様々な物を密輸し販売している。私はその１０３１の内部情報を探っている。君が運んで来た銃も１０３１から流れている」
二木田「騙された。くそー」
ソンス「面白い話をしてやろう。ＴＶでよくやっている刑事ドラマだが、あれは真犯人が捕まってもほとんど無罪になる。どうしてか分かるか？」
二木田「犯人が岸壁で自白するやつですか」
ソンス「そうだ」
二木田「そこまで話すかってほど詳細に自白するやつですか」
ソンス「そうだ。どうして無罪か分かるか？」
二木田「真犯人は家政婦だった」
ソンス「証拠が無いんだよ。ほとんどの事件が自白によって解決している。裁判で優秀な弁護士を雇って証言を覆せば無罪になる。つまり拳銃はリュックに入ってなかった」
二木田「えっ、入ってましたよ」
ソンス「入ってなかったことにするんだ」
二木田「そんなことできるんですか？」
ソンス「じつは私は警察ではなく、アメリカの諜報機関の者だ」
二木田「じつは私もアメリカの諜報機関の者だ」
ソンス「それは違う」
二木田「バレたか。くそー」
ソンス「そこで司法取引をしたいんだ。１０３１は敗戦時に旧日本軍が隠した毒ガス弾をみつけて日本政府をゆすっている。そこで日本政府は秘密裏にＣＩＡに捜査を依頼してきた。この捜査がちょっとやっかいで君に協力してほしいんだ」
二木田「超能力捜査ですね」
ソンス「潜入捜査だ。１０３１に潜入して情報をこっちに流してくれ。君は運が良い。私がこの捜査の担当だったから助かるんだ」
微笑みを浮かべて立ち上がるソンス。
片手を差し出して握手を求める。
ソンス「よろしく」
モジモジしながら立ち上がる二木田。
ソンスに頭を下げる。
二木田「ごめんなさい」
ソンス「なんでだよ！」
暗転。
曲『ピンクのハートでいっぱいよ』。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

●五場　絶対革命団
場所：スタジオ高円寺。
明転。
ほふく前進を繰り返しているケン太とサクラ。
サクラ「隊長、敵司令本部に手榴弾を投げ込みました」
ケン太「ドッカーン。バリバリバリー。パッパラパーン。よくやったーー」
サクラ「これで敵軍の部隊はすべて壊滅しました」
ケン太「よ～し。敵軍を壊滅したところで準備運動は終了だ。次はいよいよ新曲の練習に入るぞ。歌詞は覚えてきたな」
サクラ「バッチリです」
ケン太「ん。で、どうだった？」
サクラ「ヤバいっす。マジヤバいっす。バリバリよかったっす」
ケン太「そんな誉めるなよ」
サクラ「この世の物とは思えない歌詞でした」
ケン太「本気を出せばこんなものだ」
サクラ「曲と歌詞がうまく合わないので、それは今日やりながら合わせていこうと思います」
ケン太「そうなんだよ。そこはわざと合わないようにしてるんだ。だから合わなくて正解なんだ」
サクラ「やっぱそうなんですね。曲のタイトルもないんですね」
ケン太「そうなんだよ。無題とかじゃなくて、曲名そのものがないんだよ。別に売れようと思ってないから、そんなものはなくてもいいんだよ」
サクラ「それでこそ絶対革命団です。溢れんばかりの技術や才能がありながら、それをあえて隠して他の人にはできないことをやってみせる。もう鳥肌たちまくりでやばいっす」
ケン太「照れるな～もう」
サクラ「アイフォンに曲を入れてあるのでかけてもらえますか」
アイフォンをケン太に渡すサクラ。
そして発声練習を始める。
渡されたアイフォンをハンガーに掛けるケン太。
横目で見ていたサクラの発声練習が止まる。
サクラ「はい？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ケン太「ん？」
サクラ「何してるんすか？」
ケン太「なにもしてないけど」
サクラ「あの、それに曲が入っているので流してもらえますか」
ケン太「これに？」
サクラ「それに」
ケン太「マジで」
サクラ「マジです」
　アイフォンを軽く振って中の音を確かめるケン太。
　そしてデッキのＣＤやらＭＤの挿入口にアイフォンを差し込んでみる。
サクラ「ケンさん、コードです。コードを差し込めばいいんです」
　アイフォンを奪うサクラ。
　コードをデッキに差し込む。
ケン太「そうかな、とは思ったんだよね」
サクラ「この再生ボタンを押せば、曲が流れますからね」
　曲が流れる。
ケン太「おぉほんとだ。こりゃ魔法の箱だな。ってことはさ、ＰＣでつくった曲をこれに入れられるってことか？」
サクラ「そうですよ。えっ？　ケンさん、知らなかったんですか？」
ケン太「現代科学がそこまで進歩しているなんて知らなかったよ」
サクラ「ケンさんみたいな天才は現代科学なんてどうでもいいことですからね。天才は凡人とは違う、どこかそういうところがあるんですよ」
ケン太「でも至らないところは至らないって言ってくれよ」
サクラ「至らないところなんてありませんよ。ケンさんはケンさんのままでいいんです」
ケン太「よっし、それじゃあ新曲の説明を始めるぞ」
サクラ「お願いします」
ケン太「まず俺の一言から曲が始まる。この一言は毎回違う。俺が一言つぶやいたら曲ＩＮだ。分かったか」
サクラ「了解しました」
ケン太「曲がＩＮしたら俺がダンスとコーラスふたパートやる」
サクラ「カッパがやっていたコーラスもケンさんが担当するんですね」
ケン太「そうだ、ふたパート俺がやる」
サクラ「ご負担おかけします」
ケン太「うん。で、コーラス終わりでサクラが入る。わかったな」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「音きっかけじゃないんですね」
ケン太「コーラスきっかけだ」
サクラ「新しいですね」
ケン太「それが俺だからな」
サクラ「それがケンさんですよね」
ケン太「じゃー行くぞ」
サクラ「はい」
　プレイボタンを押せるように待機するサクラ。
　スタジオの中央に立って一言つぶやくケン太。
ケン太「大量破壊兵器を発見したい」
　サクラがプレイボタンを押すと曲が入る。
　コーラスも兼ねながら奇妙なダンスで後方へいくケン太。
ケン太「♪チュチュッチューチュチュッチュー」
　ケン太と入れ替わる形でサクラが中央に立つ。
　バックコーラスの位置で決めポーズを入れるケン太。
ケン太「チュー！」
　そしてサクラが歌い出す。
サクラ「♪ミサイルー。核ミサイルー」
　あらゆるボタンを押して曲を止めるケン太。
　そしてサクラに注意する。
ケン太「コーラス終わりでサクラだから」
サクラ「はい、そうですよ」
ケン太「でも違ってるからさ」
サクラ「コーラス終わりでしたよ」
ケン太「今のは俺のダンス終わりじゃん。コーラス終わりでサクラだから」
サクラ「はぁ、もう一回いいですか」
ケン太「じゃーもう一回やってみるぞ」
　プレイボタンを押せるように待機するサクラ。
　スタジオの中央に立つケン太。
ケン太「……」
　一言が思いつかないので、コーラスも兼ねながら奇妙なダンスで後方へいく。
ケン太「♪チュチュッチューチュチュッチュー」
　サクラが慌ててプレイボタンを押すと曲が入る。
　バックコーラスの位置で決めポーズを入れるケン太。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ケン太「チュー！」
　慌てて中央に出てきて歌いはじめるサクラ。
サクラ「♪ミサイルー。核ミサイルー」
　あらゆるボタンを押して曲を止めるケン太。
サクラ「あの、一言は？」
ケン太「無い時もある」
サクラ「は？」
ケン太「それよりもサクラの歌いだしが違うんだよな」
サクラ「どこがですか？」
ケン太「ダンスきっかけじゃないよ」
サクラ「コーラスきっかけですよね」
ケン太「あれ、わかってるじゃん」
サクラ「わかってますよ」
ケン太「う～ん、どうしてだ。う～ん、じゃぁこうしよう。俺がダンスとコーラスふたパートやるから分かりにくくなるんだ。俺、ダンスだけやるな」
サクラ「そうしましょう」
　プレイボタンを押せるように待機するサクラ。
　スタジオの中央に立って一言つぶやくケン太。
ケン太「普通なら殺されてるぞ」
　サクラがプレイボタンを押すと曲が入る。
　無言のまま奇妙なダンスで後方へいくケン太。
ケン太「♪……。……。」
　ケン太と入れ替わる形でサクラが中央に立つ。
　バックコーラスの位置で決めポーズを入れるケン太。
ケン太「チュー！」
　そしてサクラが歌い出す。
サクラ「♪ミサイルー。核ミサイルー」
　あらゆるボタンを押して曲を止めるケン太。
　そしてキレ気味にサクラに注意する。
ケン太「あのさ、コーラス終わりでサクラだから」
サクラ「コーラス終わりだったじゃないですか」
ケン太「どこがだよ」
サクラ「そもそもコーラスきっかけなのにコーラス無しっておかしくないですか」
ケン太「あ～なるほど。そういわれればそうだ。なかなかするどいぞ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「そうですよ。おかしいですよ」
ケン太「そうなるとダンスを捨てるべきだな。とりあえず俺、コーラスだけやるな」
サクラ「わかりました。次は大丈夫だと思います」
　プレイボタンを押せるように待機するサクラ。
　スタジオの中央に立って一言つぶやくケン太。
ケン太「組織票で勝ちたい」
　サクラがプレイボタンを押すと曲が入る。
　コーラスしながらダンスなしで後方へいくケン太。
ケン太「♪チュチュッチューチュチュッチュー」
　そしてコーラスっぽい振付を始める。
　しばらく待っていたが堪らず歌い始めるサクラ。
サクラ「……♪ミサイルー。核ミサイルー」
　あらゆるボタンを押して曲を止めるケン太。
　そして怒りながらサクラに注意する。
ケン太「だからコーラス終わりでサクラだろ！」
サクラ「最後のチュー！が無かったじゃないですか！」
ケン太「最後のチュー！ってなんだよ！」
サクラ「最後のチュー！は最後のチュー！ですよ！」
ケン太「うわー。いきなり壁にぶち当たったな」
サクラ「もうわからないんですけど」
ケン太「俺もわからない」
サクラ「どうしますか？」
ケン太「そうだな～。う～ん。自分でやっていると分からないから全部やってみてくれ」
サクラ「何をですか？」
ケン太「だからダンスとコーラスと歌と機械操作、全部やってみてくれ」
サクラ「全部できますかね」
ケン太「それくらいやらないとこの迷宮のラビリンスは抜け出せないぞ」
サクラ「わかりました。やってみます」
　スタジオの中央に立って一言つぶやくサクラ。
サクラ「雨が降ると洗濯物が乾きにくい」
　サクラが走り込んでプレイボタンを押すと曲が入る。
　また中央に走り込んでコーラスしながら奇妙なダンスで後方へいく。
サクラ「♪チュチュッチュッチュー。チュチュッチュー。」
　そしてバックコーラスの位置で決めポーズを入れる。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「チュー！」
　そして中央に走り込んで歌う。
サクラ「♪ミサイルー。核ミサイルー」
　あらゆるボタンを押して曲を止めるケン太。
ケン太「あー、はいはいはいはいはい。これはとてつもない袋小路だぞ。下手すると迷宮のラビリンスに迷い込んで永遠に出てこられなかったぞ」
サクラ「その迷宮のラビリンスの正体を教えてください」
ケン太「よし、わかった。あのな、最後のチュー！はコーラスじゃないんだよ。俺の内面から溢れ出たチュー！だ。言うなればダンサーとしての叫びだな」
サクラ「そうなると私の歌い出しと、ケンさんの叫びが微妙に重なっちゃいますよ」
ケン太「そうなんだよ。そこはあえて微妙に重ねるんだよ」
サクラ「うわ～、歌いだしで邪魔が入るなんてもう鳥肌たちまくりでやばいっす」
ケン太「そうだろ。他にも随所で邪魔を入れていくぞ」
サクラ「もうカオスですね。やっぱ凄いっす。凄すぎっす」
ケン太「それにしてもこれはとてつもない盲点であり落とし穴だった。ちょとやそっとじゃ気付かんぞ」
サクラ「よく気が付きましたね」
ケン太「運が良かったんだろうな。間一髪だった。いやー危ない危ない」
　冷汗を拭うケン太。
サクラ「カッパが抜けた穴は大きいですね」
ケン太「カッパが抜けた穴は思いのほか大きいな」
サクラ「カッパの穴、本当に大きいです」
ケン太「カッパの穴は大きいな」
サクラ「カッパの穴ですね」
ケン太「カッパの穴だな」
サクラ「カッパの穴です」
　お互い、「カッパの穴」と言い合いながら暗転。
　曲『軽快なＪＡＺＺ』。

●六場　策略の証明
　場所：ジャズ喫茶ＹＯＫＯＴＡ。
　ゆっくり明転。
　店内には軽快なジャズが流れている。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

テーブルには白い粉の包みが三つ置かれている。
それぞれマジックで『へ』・『コ』・『エ』と書かれている。
『へ』と書かれた包みを手に取るトラ吉。
トラ吉「これはヘロイン。ケシから取れる麻薬の王様で、いうなれば魔法の幸せの粉だね。間違えないようにマジックで『へ』って書いてある。やり方はスプーンに乗せて下からあぶる。すると白い煙が出てくるからそれを鼻から吸いこんでいく。しばらくすると精神と肉体がリラックスして幸せな時間がゆっくりと流れる。原産地は東南アジアにある黄金の三角地帯と中央アジアの黄金の三日月地帯が有名だね」
続いて『コ』と書かれた包みを手にする。
トラ吉「こちらはコカの葉から取れるコカイン。初期のコカコーラにはコカインが入っていて、だからコカコーラってネーミングになってる。いうなれば魔法の元気の粉だね。間違えないようにマジックで『コ』って書いてある。やり方はハリウッド映画によく出てくるように、鼻から直接吸引するのが主流だね。しばらくすると精神と肉体が覚醒して寝なくてもピンピンになる。いわゆるハイってやつ。原産地は南米のペルーやコロンビアで、ボリビアなんかは国の全輸出額をコカ輸出が上まわってる」
続いて『エ』と書かれた包みを手にする。
トラ吉「で、ジャジャジャジャーン。これが新種の麻薬エロイン。いうなれば誰もが憧れる魔法のエロい粉だね。間違えないようにマジックで『エ』って書いてある。やり方は飲み物に溶かして飲む。しばらくするとエロくなれる。エッチの為に女を口説くのに最適。こそっと飲み物に入れてかき混ぜる」
サクラ「昔の目薬みたいだね」
トラ吉「エロインを使えば少子化問題なんてふっとぶよ。噂では何処にでも生えてる植物を使ってるらしくて、原産地・製造方法ともに企業秘密になってる。知られたら商売にならないからね。販売価格はヘロインやコカインの十倍だけど高くても売れるみたい。上の組織はボロ儲けだよ」
サクラ「いい商売だね」
トラ吉「ほんといい商売だよ。麻薬は規制すればするほど裏組織の収入減になる。なんでもそうだけど、違法だと原価の数千倍の値段で売れるからね」
サクラ「違法の線引きって難しいね」
トラ吉「日本の場合は覚せい剤のような化学合成物と自然に生えてる植物を一緒くたにして、麻薬はすべて悪いものって線引きだからね。そのくせアルコールにはものすごく寛容なんだよね。アルコールは暴力事件や交通事故の原因になるし、中毒で死ぬことだってあるし、足がふらついたり、吐き気をもよおしたり、どう考えても異常だと思うけど、ほとんどの人がそれに慣れているからそれほど悪いものだと思ってないよ

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ね。でも、ここにある麻薬って違法だから慣れてなくて、人間の心理として分からないものは怖いから悪のレッテルを貼っておくってことだね。とはいえ、なにごともほどほどが大切で、ヘロインもコカインもエロインもやりすぎは絶対にダメだよ。やりすぎると魔法の国から帰って来られなくなる。エロインなんてとんでもないよ。エロインなんてやりすぎたらホントにすさまじいから。犬畜生のようにマジで見境なくなるからね。それはホントにすさまじいから」

サクラ「一回の分量ってどれくらいなの？」

トラ吉「此処にあるのは純度が高いから軽く舐める程度で充分だよ」

サクラ「ふ～ん。でもさ、こんなのどうやって手に入れるの？」

トラ吉「日本海で魚をとってくるんだよ」

サクラ「魚？」

トラ吉「そう、日本海で魚をとってくるんだよ」

サクラ「それ漁師じゃん」

トラ吉「漁師は兄弟舟とか歌ってる人でしょ」

サクラ「それは漁師じゃなくて演歌歌手でしょ」

トラ吉「演歌歌手って漁師なの？」

サクラ「トラさん、なにを言ってるの？」

トラ吉「だから、日本海で魚をとってくるんだよ。とってきた魚の腹の中に入ってるの。魚が匂いを消してくれるから犬にも分からないって訳」

サクラ「なるほどそういうことか。へー。トラさんもいろいろとやってるね」

トラ吉「俺もやりたくてやってる訳じゃないんだけどね。まぁ、成り行きでね」

紙袋からチラシを抜き取るトラ吉。

トラ吉「絶対革命団メンバー募集。きたれカッパの穴。ふ～ん、音楽やってるんだ」

サクラ「うん。でもカッパがバンドを辞めて川に戻っちゃってさ」

トラ吉「カッパって？」

サクラ「体が緑色で頭の皿が濡れていないと力が出ない奴」

トラ吉「それは想像上の生き物だろ」

サクラ「それがいたのよ。捕獲してうちのバンドで養ってたら人間世界に疲れたとか言ってカッパの世界に返ちゃった」

トラ吉「もしかして本物？」

サクラ「うん。暇さえあればキュウリ食べてた」

トラ吉「本物のカッパなんだ」

サクラ「奴は本物のカッパだった。ケンさんも本物だって断言してた」

トラ吉「ケンさんって？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「ケンさんはバンドのリーダー。普段は革命家として思想を広める活動をしてるの」
トラ吉「それってやばくない？」
サクラ「うんヤバイ。むちゃむちゃヤバイ。鳥肌が立つほどヤバイ。もうヤバイなんてもんじゃないくらいヤバイ。健全な音楽は健全な思想に宿るってのがバンドの理念でね、ルソーの社会契約論から始まって、ドストエフスキー、チェーホフ、ゴーリキー、ニーチェ、マルクス、カント、サルトルなんかも読まないといけないの。かといって、やってる音楽は思想哲学の要素なんてこれっぽっちもなくて、まったく違うことやってるの」
トラ吉「ケンさんって東京大学の人？」
サクラ「京都大学。カッパが言うには首席で合格して、いつしか思想に目覚めて退学したんだって。能ある鷹は爪を隠すって言うでしょ。ケンさんのモットーはいかにして爪を隠すかってところにあるの。あまりにも隠し過ぎちゃってるから誰にもその才能がわからないの。天才と馬鹿は紙一重って言うけど、まさにそれ。ほんとヤバイ、マジでヤバイ、もうヤバイなんてもんじゃないくらいヤバイ」
トラ吉「サクラちゃん楽しそうだね。じつは心配してたんだよ。ユキがいなくなってサクラちゃん退学したって聞いてさ。ユキにサクラちゃんのこと頼むって言われてたんだけど、俺もいっぱいいっぱいになってたから何もしてやれなくて。でも楽しそうでほんとうに良かった。このチラシ、外の見えるところに貼っとくよ」
サクラ「ありがとう」
　時間を確認するサクラ。
サクラ「ヤベッ！」
トラ吉「どうしたの？」
サクラ「バイト遅れる」
　ドアにつけている呼び鈴が「カラン・カラン」と響きわたる。
　入口に現れるイ・ソンス。
　サクラを見て会釈をするソンス。
　前に異常な視線を感じているのでゾクッとするサクラ。
トラ吉「いらっしゃいませ」
ソンス「とりあえずヒーコー」
　ヒーコーの言葉にゾクっとするサクラ。
トラ吉「はい」
　また、サクラに会釈をするソンス。
　慌てて荷物を纏めるサクラ。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

トラ吉の側へ駆け寄る。
サクラ「私、あの人苦手なの」
トラ吉「（笑）じつは俺も苦手」
サクラ「さっさと退散するね」
トラ吉「うん、またね」
出入り口でトラ吉に手を振るサクラ。
それに対してソンスが手を振り返す。
ゾクっとして逃げるように店を出るサクラ。
ドアにつけている呼び鈴が「カラン・カラン」と響きわたる。
ソンス「お前もなかなかやるな」
トラ吉「（キレ気味）そんなんじゃねーよ」
ソンス「……ご機嫌ななめか」
トラ吉「捜査協力はこれで終わりさせてもらう」
ソンス「急にどうした？」
トラ吉「アンタ、この間の女の子も利用してるだろ」
ソンス「私はあの子を助けたんだ」
トラ吉「お得意の詭弁が始まった。俺はこの仕事をおりる」
ソンス「コンゴでの恩を忘れたのか？」
トラ吉「ダンに会ったよ」
ソンス「ダンって誰だ？」
トラ吉「アフリカで俺にダイヤを預けたタクシーの運転手だ」
ソンス「知らないな」
トラ吉「とぼけんのも好い加減にしろ！　ダンからなにもかも聞き出したよ。アンタの仕事は常に他人を利用することから始まる。使えそうな人物をＣＩＡのリストから探して罠に嵌める。それがあんたのやり方だ」
ソンス「なにを言っているのかよくわからんな」
トラ吉「それならわかるように説明してやる。ダン・アシシは武器商人だ。１０３１から購入した武器をアフリカ各国の政府に闇で販売していた。毒ガス弾の捜査担当として派遣されたアンタは手始めにダンに目をつけて、航空大学を卒業して韓国の仁川国際空港で働いている娘の存在を知った。そこでアンタはダンに近づいてこう言ったんだ。ライバルの武器商人がダンの素性を仁川国際空港に明かして娘を退職させようとしてるってな。そしてダンの目の前で偽造した告発書を燃やしてこう言った。娘さんに幸せな人生を送って貰いたい、ＣＩＡは航空会社に圧力をかけてでも娘さんの雇用を守ってやるってな。そうやって恩を売って相手を丸め込むのがアンタの常套手段だ。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ダンを丸め込んだアンタは日本人の協力者を探した。毒ガス弾の捜査にはどうしても日本人の協力が必要だった。そこでアフリカにいた俺に目を付けた。俺はその策略にまんまと嵌ったって訳だ」
ソンス「……」
トラ吉「アンタ汚ねえよ。アンタのやり方はいかに危険な仕事を他人にやらせて、いかに自分を安全な状態に保つかだ。このままだと俺はアンタの捨て駒になる。これで終わりにさせてもらう」
ソンス「……わかった。好きにしろ」
トラ吉「言われなくても好きにする」
ソンス「ただし、１０３１の日本支部の場所は教えてくれ」
トラ吉「今、地図をかいてやる」
　絶対革命団のチラシを裏返して地図を描く。
ソンス「情報は確かだろうな」
トラ吉「俺が運び屋だから間違いない」
　テーブルの上にある白い包みを手に取るソンス。
ソンス「運ぶのはエロインだな」
トラ吉「苦労して得たチャンスだから無駄にするなよ」
ソンス「言われなくてもわかってるさ。この手で事件を解決してみせる」
トラ吉「それと最後に一つだけ教えといてやる。１０３１に毒ガス弾の情報はなかった。恐らく誰かが捜査の混乱を狙って１０３１の名を語ってる」
ソンス「情報がないのはトップシークレットだからだ。素人が適当な推理をするな」
トラ吉「いや、真犯人は別にいる。アンタは現場を知らないから分からないんだ」
ソンス「私も最後に一つだけ教えといてやる。１０３１が取引場所を指定してきた。それが何処だか分かるか？」
トラ吉「……」
ソンス「此処だ。此処を指定してきやがった。ミイラ取りがミイラだ。上には保護して貰うよう頼んでやるから心配するな」
トラ吉「折角の申し出だがお断りさせてもらう」
ソンス「殺されるぞ」
トラ吉「俺は死ぬのなんか怖くない。どうして怖くないか分かるか？」
ソンス「……」
トラ吉「死ぬ覚悟さえあれば怖くないんだよ。死ぬのは怖い事じゃない。むしろ新しく始められる。いったん終わりにして全てをもう一度始められるんだ」
ソンス「宗教論か？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

トラ吉「此処は自由に使ってもらって構わない。どうせそのつもりだろ」
ソンス「あぁ、そうさせてもらう」
地図を再び描き始めるトラ吉。
用心深く外の様子を確認するソンス。
暗転。
曲『厳かなＪＡＺＺ』。

●七場　工作員訓練
場所：ジャズ喫茶ＹＯＫＯＴＡ。
厳かなＪＡＺＺが流れている。
神妙な表情で座っている二木田。
服装はコテコテのスパイファッション。
その側で催眠術をかけるように語るソンス。
ソンス「正直なところ、私は君を仲間に引き入れるべきか迷っていた。君の行動や言動が余りにも常識を逸脱しているので、その価値について大いに疑問を持っていたからだ。しかし君は施設で行われた記憶力、思考力、体力の測定においてハイレベルな数値を叩き出した。欠点といれば日本語が若干不慣れなくらいで、スキルの習得は誰よりも早く、何より吸収力がズバ抜けていた。君の天性の素質を知るにいたってその価値を改めるしかなかった。君な誰よりも優秀な捜査官になれる素質を持っている」
頷く二木田。
ソンス「私と君は状況がとてもよく似ている。君は日本人の母親とフランス人の父親との間に生まれた。祖国を持たぬまま、イギリスのオックスフォード大学を卒業している。私も君と同じく祖国を持たなかった。そして君と同じく運び屋の容疑で捕まり、司法取引をしてＣＩＡになった。私と君は状況がとてもよく似ている」
頷く二木田。
ソンス「君との出会いによって私の心にようやく希望の光が見えてきた。なんとしてでも毒ガス弾を発見してこの事件を解決してやる。あわよくば１０３１を一網打尽にして英雄になってやる。私と君の功績はＣＩＡの歴史に燦然と輝くことになる。その栄誉が今まさに目の前に転がっている」
頷く二木田。
ソンス「それではこれより任務を遂行する為の実践訓練を行う。この訓練は自分自身を守る為のものだ。油断することのないよう気を引き締めて望んでもらいたい」
頷く二木田。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンス「実践訓練に伴い本部から支給がある」
日の丸の刻印がされたアタッシュケースを出すソンス。
ソンス「開いてみなさい」
アタッシュケースを開ける二木田。
中にはパスポートと免許証が入っている。
ソンス「日本政府に君の身分証明書をつくらせた。君は今日から日本人、二木田ジョゼフィーヌに生まれ変わる。コードネームは『ＮＩＫＩＴＡ』だ」
身分証明書をつきあげてガッツポーズをみせる二木田。
舞台に『氏名：二木田ジョゼフィーヌ。コードネーム：ＮＩＫＩＴＡ』の文字がポンと現れる。
上機嫌でソンスに敬礼をする二木田。
二木田「二木田、今日は殺し道具をつくってきました！」
ソンス「殺し道具？」
二木田「フランス人のジャン・レノさんにつくってもらったんです」
ソンス「それは映画俳優のジャン・レノさん？」
二木田「そんな訳ないじゃないですか。どうして映画俳優のジャン・レノさんが殺し道具をつくるんですか」
ソンス「そうだよね」
二木田「そうですよ。私が言っているのはフランス人のジャン・レノさんです」
ソンス「でも映画俳優のジャン・レノさんはフランス人だよね」
二木田「そうですよ。でも私が言っているのはフランス人のジャン・レノさんです。映画俳優のジャン・レノさんじゃありませんよ。フランス人のジャン・レノさんです」
ソンス「はぁ」
二木田「フランス人のジャン・レノさんはレオンと言う名で殺し屋をやっていたんです。女子供は殺さないといったポリシーを持つ超一流の殺し屋で、少女マチルダとの出会いを切欠に殺し屋を辞めて一年ほど前から日本に暮らしているんです。だから殺し道具をつくるのが得意なんです。イさんはどうですか？」
ソンス「どうって何が？」
二木田「殺し道具をつくるのは？」
ソンス「つくるのは難しいな」
二木田「それならフランス人のジャン・レノさんに頼んだのは正解でした。しかも百円ショップの商品だけでつくってくれたんです」
ソンス「収納道具じゃなくて？」
二木田「収納道具をつくってどうするんですか。どうです？　みたくないですか？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンス「何を？」
二木田「殺し道具に決まってるじゃないですか。驚愕の性能を確認してみたくないですか？」
ソンス「じゃあ、みせてもらえる」
二木田「はい、それでは驚愕の性能を披露させて頂きます」
百円ショップのビニール袋から殺し道具を取り出す二木田。
殺し道具をつきあげてガッツポーズをみせる。
舞台に『ＮＩＫＩＴＡが殺し道具を手に入れた』の文字がポンと現れる。
プラスチックの整理箱で台が作られている。
その上にゴムが固定されている。
見る限りナイフをゴムで引っ張る仕組みになっている。
ナイフには鳥の羽が貼り付けてある。
二木田「これが凄いんです。ハイテクなんです。まずですね、このゴムを引っ張って此処にセットするんです。で、このナイフを此処に差し込みまして準備完了です」
ソンス「それだけ？」
二木田「今、二木田だから素早く出来ましたけど、普通の人はこうはいきません」
ソンス「そんなんで殺せるの？」
二木田「ぶち殺せます。殺し屋の世界では常識です。それとですね、ナイフにハネがついてるの気が付きました？」
ソンス「それはもう」
二木田「これ二木田の工夫なんです。ハネが付く事によって射程距離が伸びて、命中精度が各段に上がるんです。青空を飛びまわる鳥を見ていて気が付いたんです。ヒントってどこに落ちてるかほんとわからないものです。フランス人のジャン・レノさんも此処までは気が付かなかったようです。私がこれに気が付いた時の衝撃ったらなかったです。恐ろしいものをつくってしまうことへの恐怖感で冷や汗が出て怖くなりました。科学者が火薬や原爆をつくったのと同じような気持ちでしょうね。それでは実演してみせますから少し離れて下さい。とても危ないですからね」
ナイフをセットする二木田。
そしてレジの横に置かれている小さな植木鉢に照準を定める。
二木田「いきますよ」
ゴム止めを外す二木田。
ゴムが弾道の速さで室内の壁に命中する。
ナイフはそのまま台の上にある。
ソンス「どうした？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

二木田「ゴムが固定されていなかったもようです。殺傷力の高い兵器ですから安全装置が起動したと考えてください。もう一度やりますんで、当たると死にますから離れて下さい」
ガムテープで素早くゴムを固定する二木田。
そのままナイフをセットして、小さな植木鉢に照準を定める。
二木田「いきますよ」
ゴム止めを外す二木田。
殺し道具そのものが弾道の速さで室内の壁に命中する。
ナイフはそのまま台の上にある。
二木田「残念ながら不具合が発生致しました。精密機械ですので不具合はつきものです。システムを再点検して、また出直してきたいと思います」
殺し道具をレジの奥に片づける二木田。
ソンス「これは私からの個人的なプレゼントだ」
銃を差し出すソンス。
その銃を受け取る二木田。
銃をつきあげてガッツポーズをみせる。
舞台に『ＮＩＫＩＴＡが銃を手に入れた』の文字がポンと現れる。
そして悪ふざけ気味に銃口をソンスに向ける。
すかさず銃を左手で押さえて銃口を変えるソンス。
そしてソンスの右手に握られている銃の銃口は二木田に向けられている。
ソンス「銃口を向けるとこうなる」
二木田「……」
ソンス「まずは銃の説明をする」
二木田「よろしくお願いします！」
説明をしながら銃の持ち方、構え方をやってみせるソンス。
それとまったく同じ動きをする二木田。
ソンス「エルフ５１４。私が使っている銃と同じものだ。ニューヨークのエルフ社が私服刑事用に開発したモデルで扱い易い仕様になっている。銃は新品よりも手入れの行き届いた中古の方が手に馴染みやすくて扱いやすい。その銃は扱いに慣れた刑事が使っていたらしく、細かい手入れが行きとどいている。一昔前まではオートマチックは壊れやすいため、シリンダー式のリボルバーが主流だった。しかし今は違う。オートマチックの方が壊れ難くなっていて射撃性能も安定している。重さは弾丸抜きで４５０グラム。小型だが殺傷能力は十分にあり、反動も少ない。どちらかといえば長い距離よりも、短い距離の命中精度が抜きん出ている。我々が想定している室内での銃撃

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

戦にぴったり合う。なお、銃のうけわたしや持ち運びは一発の弾丸も入れずに行う。よってその銃のマシンガンは空だ。とはいえ銃は人を殺すための道具だ。銃をみたら基本的に弾丸が装填されているものとして考える」

二木田「イエッサー」

ソンス「次に銃の扱い方を教える」

二木田「よろしくお願いします！」

説明のあいだに扱い方を覚えてしまう二木田。

ソンス「マシンガンを抜く時は必ず安全装置をかけておく。キャッチをはずしてマガジンを抜いたらスライドを後ろに引いてチェンバーにある弾丸をはじきだす。スライドは開きっぱなしになるからこうして引き金を引く。するとスライドは閉じる。そのとき撃鉄はコックされたままになる。もう一度引き金を引くと撃鉄は下りる。それから新しいマガジンを押しこむ。まわりを警戒しながらでも、たとえ暗闇であっても、いかなる状況でも素早くマガジンの脱着ができるよう体に覚え込ませる」

その場ですばやくやってのける二木田。

ソンス「相変わらず飲み込みが早いな」

二木田「二木田、飲み込み早いです」

ソンス「では、次に移る。スパイの三大心得は覚えたな」

二木田「一、瞬時に相手の数を把握し何者か見極める」

ソンス「相手が隠れている可能性もある。敵なのか、見方なのか、気配で読み取れ」

二木田「ニ、瞬時に部屋の間取りと位置関係を把握する」

ソンス「ドアの数、非常口、イス、机、ちょっとした物でも見落とすな」

二木田「三、瞬時に相手の嘘を見抜き裏の裏をつけ」

ソンス「体の仕草、目の動き、声の出し方、相手を見極めて判断しろ」

二木田「イエッサー」

ソンス「わかってほしい。私たちがこれから騙す相手はテロ組織とも繋がりがある国際犯罪組織だ。騙そうと思って簡単に騙せる相手ではない。僅かなミスが命取りになる」

二木田「イエッサー」

ソンス「これが１０３１の日本支部の場所を記した地図だ」

トラ吉の描いた地図を受け取る二木田。

ソンス「これが新種のエロインだ」

エロインを受け取る二木田。

ソンス「君にはそのブツをその地図にある１０３１の日本支部まで運んで貰う。ただしブツを届けるのが今回の任務ではない。ブツを届けて相手と接触し、１０３１の組織に潜り込む。相手の懐に飛び込むスキルが求められるとても困難なミッションだ。君

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

は１０３１の運び屋をしていたから上手くやれば疑われずに潜り込める筈だ」
二木田「イエッサー」
ソンス「うん。孫子いわく、情報を制する者は戦いを制す。三日後にこの喫茶店で日本政府と１０３１との取引が行われる。それまでに相手の情報を得て有利に立ちまわるのが私たちの狙いだ」
二木田「イエッサー」
ソンス「１０３１の日本支部は既に衛星を使って監視している。仮にトラブルが起こっても対処出来る体制を整えているから安心して任務を遂行してくれ」
二木田「イエッサー」
ソンス「うん。それでは実践訓練を行う。私が相手役をやるのでシミュレーションでもしてみようか」
二木田「イエッサー」
イスやテーブルの配置を調整して相手役を演ずる準備を整えるソンス。
エロインと地図をアタッシュケースに入れる二木田。
準備が整ったところでポンと手を叩くソンス。
アタッシュケースを持ったまま酔いつぶれたような格好で歩きだす二木田。
千鳥足でなにやら文句をぐちぐち言っている。
ポンポンと手を叩いて止めるソンス。
ソンス「ひとまず待て。どうしてそうなる？」
二木田「夜の街を徘徊するシーンです」
ソンス「徘徊するシーン？」
二木田「はい。日々の激しい緊張の連続で精神がボロボロになってアルコールを浴びるほど飲みました。そのような眠れない夜をシミュレーションしました」
ソンス「ちょっとよく分からないな」
二木田「スパイってそういうものだと思います」
ソンス「なるほど。え～っと、１０３１の日本支部に入るところからやる」
二木田「イエッサー」
取引相手の役を演ずるためイスに座るソンス。
準備が整ったところでポンと手を叩くソンス。
気だるく頭痛を伴いながらドアをノックする二木田。
二木田「おい、あけろ」
ポンポンと手を叩いて止めるソンス。
ソンス「一旦とめる。どうしてそうなるのかな？」
二木田「前夜にかなりのワインを飲んでいますので当日もまだ残っている筈です」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンス「仕事の前夜はアルコールを飲むな」
二木田「ワインはアルコールではなくて最高の夜を演出する魔法の水です」
ソンス「アルコールだ。相手にエロインを渡すところから始める」
二木田「イエッサー」
　ポンと手を叩こうとして辞めるソンス。
二木田「ホゲ～」
　そう言いながらコケる二木田。
ソンス「悪い。前もって一つだけ伝えておくことがある。本来の運び屋はトラ吉だ。それがトラ吉ではなく、君であることに相手は必ず不信感を抱く筈だ。そして相手は必ず君が何処の誰なのか探ってくる。私のこれまでの経験では経歴や素性をつくり込みすぎると、後々矛盾が出て整合性がつかなくなる。君はどうもつくりこみすぎる癖があるのでその点が心配なんだ。そこでシミュレーションの前に一つだけスキルを教える。このスキルはミッションの成功率をあげるポイントになるのでしっかり覚えておいてくれ」
二木田「イエッサー」
ソンス「いいか、まず何処の誰なのか聞かれたら話したくないと言え」
二木田「話したくないです」
ソンス「そうだ。そしてどうして話したくないのか聞かれたら……こう答えろ」
　暗転。
　曲『ピンクのハートでいっぱいよ』。

●八場　きたれカッパの穴
　場所：スタジオ高円寺。
　机に『絶対革命団メンバー募集　きたれカッパの穴』と書かれた紙が貼ってある。
　ケン太とサクラは面接官のようにイスに並んで座っている。
　しばらく無言のまま時は過ぎる。
ケン太「誰も来ないね」
サクラ「これだとカッパの穴、埋まりませんね」
ケン太「カッパの穴、埋まらないな」
サクラ「暇すぎて疲れてきました」
ケン太「あのさ、募集広告って何処らへんに打ったの？」
サクラ「私のアパートの近くにあるスーパーとパン屋さんです」
ケン太「それじゃダメじゃないか？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「ちょんと見える所に張らして貰いましたよ」
ケン太「じゃなくて、雑誌とかに載せないとさ。それだとターゲットが買い物している主婦になるだろ」
サクラ「平気ですよ。高円寺は若者の町ですから。それに共通点がある人じゃないと仲良くなれる自信がないです。それよりケンさん、隣のスタジオを借りてるバンドの名前みました」
ケン太「(含み笑い) モッコリ横綱君か」
サクラ「どんなバンドなんですかね」
ケン太「そりゃモッコリしてんじゃないか」
サクラ「横綱君とモッコリ君の二人組みですかね」
ケン太「俺は横綱君、大関君、関脇君やらがいるグループだと思うな」
サクラ「そうすると衣装がモッコリですか？」
ケン太「そうだな。マワシに仕込んでモッコリさせるか、マゲをモッコリするかだな」
サクラ「それだとつまらなくないですか」
ケン太「つまらないな。でも所詮はその程度だよ」
サクラ「ツッパリ桃太郎みたいなもんですね。ろくな才能もないのに雰囲気だけでやってる輩ですね」
ケン太「あのなサクラ」
サクラ「はい」
ケン太「どうやらあのタヌキ、モモちゃんと寝てたみたいだ」
サクラ「やっぱり」
ケン太「俺はあのエロタヌキが羨ましいよ。あ～ぁ。俺にも権力があったらな～」
サクラ「とっちめたんですよね」
ケン太「あー、とっちめてやった。頭にきたから奥さんにバラすぞって脅したんだ。そしたら百万円あげるから勘弁してくれって」
サクラ「ほんと最低ですね。お金で解決しようって根性が気に入らないです」
ケン太「でもなサクラ、俺は今日、その金を取りに行く」
サクラ「なんでそうなるんですか」
ケン太「これでも頑張って五十万円から百万円に吊り上げたんだよ」
サクラ「お金で納得するんですか」
ケン太「そう言うな。俺はとても貧しい家にうまれてこれまでたくさん苦労してきた。子どもの頃から明らかにまわりとは違う自分の境遇に常に負い目があった。どうして産まれた環境によってこうも違ってしまうのだろうかと悩んできた。だから金が無いつらさは嫌というほど経験している。金がないと四苦八苦しながら生活するから一杯

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

一杯になるだろ。一杯一杯だと心に余裕がなくなって上手く行くものも上手くいかなくなる。その上手く行かないものが更に上手く行かないものを生み出す。どんどん空回りしてどんどんドツボに嵌ってくんだ。資本主義とはそういうもので、それが資本主義の現実なんだよ。資本主義は絶対的に不条理が生じる。その不条理を誰もが不条理と気が付かなくなっていて、いつのまにか不条理が公然とまかり通っている。これは大航海時代から産業革命に至る過程で世界の常識になってしまった。ごく一部の者たちが資産を独占して既得権益が守られるような社会システムにつくりあげられている。たとえば今現在、世界に出回っている資産は地球上にある資産の半分以下だ。ほんのごく一部の者達が世界資産の半分以上を独占している。そしてそいつらは戦争や混乱を起こして貧しい者たちを放置している。人は本質的に自分のまわりさえ平和であれば良いと誰もが思っている。自分と関係のない所で何が起ころうが知ったこっちゃないと思っている。その結果、多くの人びとが不条理を不条理とは気付かないでいる。資本主義の宿命だよ。だからこそ俺は資本主義に立ち向かっているんだ。まぁそんなことはどうでもいいんだ。俺はどうも話がいつも横にそれるからいけない。つまり俺が言いたいのはひとつだ。結局のところ金が無いと出来る事も出来なくなる。人は金で動くんだよ。金で人の心って買えるからな」

サクラ「確かに人の心はお金で買えます。だからこそ、お金のある不幸もありますよ。お金は人間の持つ妬みや嫉みを呼び醒まします。火のない所に煙を立ててでも足を引っ張ろうとしてきます。お金欲しさに人が群がってきて、お金を持つ者は猜疑心が強くなります。私が他人と上手く付き合えなくなったのは、そういうのが嫌で嫌で仕方が無かったっていうのもあったような気がするんです」

ケン太「でもさ、金を捨てるのは簡単だろ。それをしないってことはさ、金のある不幸と金のない不幸を天秤にかけたら、金のある不幸の方がマシだと思うぞ」

サクラ「うん、それは確かにそうです。私はそれを絶対革命団でようやく学んだ気がするんです。お金の無い不幸をようやく肌感覚として得たことで私は精神的に強くなれた気がするんです。ケンさんといると負けてたまるかといった根性がうまれてきて、辛いことも乗り越えられるようになりました。他人からどう思われようが気にならなくなりました。私とケンさんは正反対の境遇に生まれてきて、それぞれ違う育ち方をしてきたのに、こうやって今は同じ方角を向いて生きている。それが人の世の面白さなのかもしれないとつくづく思うんです」

ケン太「サクラは変わったな」

サクラ「どこらへんが変わりました？」

ケン太「前向きになった」

サクラ「すべてケンさんのお陰です。思想教育の賜物です」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

急にせき込み始めるケン太。
サクラ「ケンさん、飲み物でも買ってきましょうか」
ケン太「おう。あったかいの頼むわ」
千円札を差し出すケン太。
ケン太「ほい、一千万円」
サクラ「ついでにそこらへんの土地も買ってきます」
ケン太「頼むぞ」
サクラ「任せてください」
一旦はけて、すぐ戻ってくるサクラ。
サクラ「ケンさん、ケンさん。今、モッコリ横綱君がスタジオに入っていきました」
ケン太「どんな奴だった？」
サクラ「チャラチャラしてました」
ケン太「チャラチャラしてやがったか」
サクラ「あれはアホですね。所詮はその程度です」
ケン太「所詮はその程度だ」
サクラ「では行って来ます」
はけるサクラ。
ケン太「世の中アホばっかだな」
咳き込むケン太。
ケン太「寒気がするな」
スポーツバックを開けるケン太。
中からプラカードやら、プラカードやら、プラカードやらが出てくる。
そしてカッパのキグルミが出てくる。
ケン太「あれ、これカッパのだな。カッパの奴キグルミを脱ぎ捨てて川に戻っていったんだな。カッパは田舎から上京してきて世間に認められたい思いが人一倍強かったからな。音楽で飯なんて食える訳がないのに、それを夢見て人一倍頑張っていたからな。サクラはカッパに裏切られた気持ちがあるみたいだけど、カッパはカッパなりの苦渋の選択だったんだろうな」
そう言いながらカッパのキグルミを着る。
そして机に置かれているアイフォンを手に取る。
ケン太「時代はどんどん進んでるな。どんどん新しい技術が生まれて、どんどん科学が進歩してる。その技術の発達によって偽物でも本物っぽく見せられるようになる。世の中が便利になればなるほど本物と偽物の区別がつかなくなってくる。たとえ才能がなくても金さえあればなんとかなる。たとえ努力しなくてもコネさえあればなんとで

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

もなる。いくらでもごまかしができちゃうんだよな。だからこそコネテみたりネッテみたり、分割してみたり統合してみたり、いろいろやってるけどどうなんだかな～。そうしたことも含めてサクラはついてきてくれるんだから有難いよ。サクラの為にも頑張って俺なりの音楽を続けていくしかないな」

そこにやってくるトラ吉。

トラ吉「こんにちは」

ケン太「おっと、どうぞどうぞお入りください。その席にどうぞ」

トラ吉「あっはい」

座るトラ吉。

元の席に着くケン太。

ケン太「はじめまして」

トラ吉「こちらこそはじめまして」

ケン太「私が絶対革命団の主宰兼、作詞兼、作曲兼、ダンサー兼、のケンです。只今ボーカルの者が買い出しに出ておりまして、戻ってくるまでお待ちいただくのも悪いので始めさせて頂きます。え～この度は絶対革命団メンバー募集、きたれカッパの穴にお越し頂きまして心より感謝申し上げます」

トラ吉「あっ、違います」

ケン太「違うとは？」

トラ吉「オーディションを受けに来たんじゃないんです」

ケン太「なんだ、ひやかしか」

トラ吉「違いますよ」

ケン太「あ～はいはいはい。わかったぞ。さてはモッコリ横綱君のメンバーだな。それにしても本当にチャラチャラしてるな。チャラチャラどころの騒ぎじゃないぞ。もうチャラチャラを通り越してチャラ助になってるぞ」

トラ吉「チャラ助って何ですか」

ケン太「チャラ助はチャラ助だろ。いいかチャラ助、人の真似をして良い所を取り入れるのは大切だ。しかし何が必要で何が必要でないのか、自分で判断できるようにならないとダメだぞ。流行っているからとか、皆がしているからとかじゃダメなんだ。世間の空気に流されるのではなくて自分のフィルターをしっかり持て。聞きかじりの情報に惑わされのではなくて自分のフィルターにしっかりかけろ。いいかチャラ助、下らない自己主張を抑え、己の欲望を抑え、信念と情熱を内に秘めることでようやく横綱としての色気がうまれる。取り組みの一つ一つに抑制された佇まいと成熟した存在感を与えてくれる。それこそが横綱のあるべき姿だろ。横綱を名乗るならまずは前髪を切れ、前髪を！　坊主にしろ、坊主に！」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

トラ吉「はぁ？」
ケン太「はぁ？って。君はモッコリ君の方か」
トラ吉「モッコリ君？」
ケン太「だから君は横綱君か、それともモッコリ君か、どっちだ」
トラ吉「どっちも違います」
ケン太「それなら大関君だな。いや関脇君、いや十両、いや幕下君だな」
トラ吉「もうどれでもでもいいですけど」
ケン太「んっ？……幕下君は今、もうどれでもいいですけどと言ったのかな？」
トラ吉「言いました」
ケン太「どれでもいいもんか、コラッ！　横綱を名乗るから少しは分かる人物かと思っていたら大間違いだ。君には幕下さえも名乗る資格がないぞ。まぁそんなことはどうでもいいんだ。いや、やはりそれはよくない。すべての関取に品格は必要だ。君には関取そのものを名乗る資格がない。そうだ。君は今日から名前をウンコ君にしたまえ。自己紹介の時に私はウンコ君ですと名乗りなさい」
トラ吉「なんでだよ」
ケン太「なんでもだ。そしてバンド名はモッコリウンコ君にしなさい。それくらいが君たちにはぴったりあってる。それでも私はウンコ君を見捨てはしないぞ。人間は不完全だから改善の余地がすべての人にある。そもそも資本主義がＴＶや音楽やアニメなどを使って各家庭に入り込み、おかしな情報と、おかしな価値観と、おかしな常識を若者たちにすり込んでしまった。その結果としてウンコ君のような青年が育っている。これはウンコ君の責任ではなく、この国をつくってきた政治家の責任だ。しいては日本最大の拝金主義者の集まりであるマスコミの責任でもある。だからウンコ君は何一つ悪くないぞ。よく聞くんだウンコ君。本を読んでそれを信じるなら読むな。噂を聞いてそれを信じるなら聞くな。映像を見てそれを信じるなら見るな。なぜなら信じると疑わなくなる。信じると分析しなくなる。信じると論理がなくなる。だから信じる者は裏切られる。信じるから裏切られる。いいかウンコ君。どのようなメディアやコンテンツを介しても起こったことを再現するのは不可能だ。起こった事実を再現しようと試みた瞬間にそれはもう事実ではなくなる。それにもかかわらず私たちは報道された物語を事実として飲み込み、それを虚構と疑うことなく生きている。社会生活を営む人のすべてが虚構のなかに生きていて、それがごくごく当たり前の日常になっている。それが幾ら虚構であると訴えてもまわりがそれを許さないのだ。許さないのだからそれに合わせて生きて行くしかないのだ。同じように信じているふりをして生きて行くしかないのだ。それでも学ぶことによって人は考えるようになる。考えることによってオリジナリティーを持つようになる。オリジナリティーを持つことによって

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

まわりに惑わされなくなる。私はウンコ君にそういう人になってもらいたいと願っている」
　そこにやってくるサクラ。
サクラ「あっ、トラさん」
トラ吉「サクラちゃん」
サクラ「どうしたの？」
トラ吉「急なんだけどさ、今からフィリピンに行くんだ」
サクラ「また旅にでるの？」
トラ吉「海底油田を探しにいってくる」
サクラ「相変わらずだね」
トラ吉「これがかなり確実な情報なんだよ。しばらく会えなくなるけど帰ってきたら連絡するよ」
サクラ「頑張ってね」
トラ吉「うん。ケンさん、お話面白かったです。サクラちゃんをよろしくお願いします。
　（サクラに）じゃーまたね」
サクラ「じゃーまたね」
　はけるトラ吉。
ケン太「腹違いのお兄さん、また旅に出ちゃたね」
サクラ「大学の先輩です。大学生の頃もよくそうやってからかわれました。それよりもそのカッパの抜け殻、どうしたんですか」
ケン太「バックに入ってだんだよ。カッパが置いていったんだろうな。どうやら風邪ひいたみたいで寒くてな」
サクラ「顔色が悪いですもんね。体調悪そうです」
ケン太「疲れが溜まってるみたいだ」
サクラ「あっ、これケンさんのです。栄養ドリンクのほうがいいかなって思って」
　栄養ドリンクを受け取るケン太。
ケン太「ありがとう。気が利くね」
サクラ「コンビニのおばちゃんおススメの栄養ドリンクです。七百万円もしちゃいました」
ケン太「（笑）インフレが凄いことになってるな」
　そこに警戒しながらやってくる二木田。
　メンバー募集のチラシを手に持っている。
　トラ吉の描いた裏面の地図ではなく、表面の地図を見ている。
　カッパをみて思わず吹き出してしまう。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

二木田「カッパじゃん。カッパがいる」
ケン太「メンバー希望の方ですか」
二木田「そうです」
ケン太「どうぞどうぞお入りください。その席にどうぞ」
元の席に着くケン太とサクラ。
栄養ドリンクは机の上に置く。
あたりを見渡しながら椅子に座る二木田。
二木田「えっと、カッパ一匹に女性が一人、カッパ一匹に女性が一人。イス、机、イス、机。よっし完璧」
ケン太「はじめまして。私が絶対革命団の主宰兼、作詞兼、作曲兼、ダンサー兼、のケンです。で、こっちがメインボーカルのサクラです」
無言ながら精一杯の会釈をするサクラ。
ケン太「え～この度は絶対革命団メンバー募集、きたれカッパの穴にご参加くださり誠にありがとうございます」
二木田「（含み笑い）誤魔化そうとしてもそうはいきませんよ。なるほど、そうやってカモフラージュしている訳ですね。なかなか手が込んでいますね。わかってます。先にブツですよね。（胸に手を入れ）それではブツを出しましょうか」
ケン太「ブツですか？」
二木田「ポロンと出しましょうか」
ケン太「私どもはそのような路線ではありませんので結構です」
二木田「ん？……もしかして二木田が何処の誰なのかを先に聞くつもりですか」
ケン太「いえ、まずは二木田さんに私たちの音楽を聴いてもらって……」
二木田「ちょっと待ってください。どうして私の名前を知ってるんですか」
ケン太「先ほど、二木田が何処の誰なのかを先に聞くつもりですかと言っていたので」
二木田「油断も隙も無いですね。はっはーん。つまりそうやって二木田が何処の誰なのか探るつもりですね。それは話したくないです」
ケン太「話したくないことは話さなくてもいいですよ」
二木田「そうです。たしかに話したくないです。でも、どうしても聞きたいのであればどうして話したくないのか話さなくてはなりません」
ケン太「大丈夫です。誰でも触れられたくない事情の一つや二つあるものです。だから話さなくてもいいですよ」
二木田「でも、どうして話したくないのか話すだけですよ」
ケン太「聞いた方がいいんですか？」
二木田「そうじゃありません。聞かれるのはとても困ります。とても困りますが、そこ

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

までおっしゃるならどうして話したくないのか話さなくてはなりません」
ケン太「でも聞かれると困るんですよね」
二木田「そりゃ困ります。二木田も出来れば話したくありません。話したくないですけども、そこまでおっしゃるならどうして話したくないのか矛盾なくお話しできます」
ケン太「無理をしなくても良いですよ」
二木田「でも、どうして話したくないのか知っているのと、知らないのとでは心のモヤモヤ度が違いますよ」
ケン太「心のモヤモヤ度とはなんでしょう？」
二木田「心のモヤモヤ度は心のモヤモヤ度じゃありませんか。えっ、もしかして二木田がどうして話したくないのか知っているから聞かないんですか？」
ケン太「どうして話したくないのかは知らないです」
二木田「知らないのに聞かないのは、つまり面倒くさいからですか？」
ケン太「そうではありません」
二木田「それなら聞いてみてください」
ケン太「聞くとどうなるんですか」
二木田「そうすると二木田がどうして話したくないのか分かりますから、二木田が何処の誰なのか探るのを辞めます」
ケン太「それなら同じですよね」
二木田「同じじゃないですよ。どうして話したくないのか知っているのと、知らないのとでは同じじゃないですよ。やっぱりどうして出来れば話したくないのかを知ってるから聞かないのですね」
ケン太「（よく分からず）ん、ん、まあ、そうですね」
二木田「どうして知ってるんですか？」
ケン太「何をですか？」
二木田「どうして出来れば話したくないのかですよ」
ケン太「それは知らないです」
二木田「まあ、そうですねって言ったじゃないですか」
ケン太「話の流れがよく分かんなくなちゃって、すみません」
二木田「知らないのなら聞いてみてください。そうしたら二木田がどうして出来れば話したくないのか分かりやすく説明してあげます」
ケン太「話したくないことを聞くのは気が引けますね」
二木田「でも、ちょっとだけでも話しましょうか。物凄く分かりやすいんですよ」
ケン太「その前に審査を始めてもいいですか？」
二木田「審査ってなんですか？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ケン太「これから一緒にやっていけるかどうかの審査です」
二木田「いきなりその話ですか。しかもそちらから。はっはーん。つまりそうやって二木田が何処の誰なのか探るつもりですね。仕方がありません。二木田も出来れば話したくないのですが、そこまでおっしゃるならどうして話したくないのか話さなくてはなりません」
ケン太「話さなくてもいいですよ」
二木田「どうして話さなくてもいいんですか？」
ケン太「とても深い事情をお持ちのようなので、それについてはメンバーに加わってからにしましょう。メンバーに加わる前にそうした込み入った話をするは違う気がするんです。ですから先に審査を始めてもいいですか」
二木田「先に審査があるんですね。それならそれを早く言ってください。覚え損になるんじゃないかと思ってハラハラしたじゃないですか」
そう言いながら立ちあがって体をほぐす二木田。
ファイティングポーズをとる。
二木田「さあこい！」
ケン太「違うんです」
二木田「先に審査するんですよね」
ケン太「審査というのは私たちの特殊さをどう感じるかの審査です。私たちのやってることは特殊なので、こちらが選ぶよりも二木田さんがその特殊さを理解したうえでどうするか判断してほしいんです。その特殊さを言葉では伝えるのが難しいので、ここで実演して二木田さんに審査をしてもらいます」
二木田「特殊なのはよくわかります」
ケン太「私たちのことを知ってるんですか？」
二木田「知らなかったら来ないですよ」
ケン太「ほんとうはそうあるべきなんですけど、そうでないかたも結構いらっしゃるので。そうですか。私たちのことご存じなんですね」
二木田「もちろんです」
ケン太「それはありがとうございます。それでも一応、私たちの特殊さを感じてそのうえで決めてください。サクラ、いくぞ！」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「はい！」
ケン太「それでは審査を開催いたします！」
大きく拍手するサクラ。
ケン太「準備は良いか？」
大きく頷くサクラ。
プレイボタンを押せるようにアイフォンを持って待機するサクラ。
スタジオの中央に立つと一言つぶやくケン太。
ケン太「間違えたと思った時は間違えている」
サクラがプレイボタンを押すと曲がはいる。
コーラスも兼ねながら奇妙なダンスで後方へいくケン太。
ケン太「♪チュチュッチューチュチュッチュー」
ケン太と入れ替わる形でサクラが中央に立つ。
バックコーラスが終わるのを確認して歌うサクラ。
サクラ「♪ミサイルー。核ミサイルー」
ケン太「チュー！」
ダンサーとしての叫びと歌いだしが重なる。
と同時にせき込みながら倒れるケン太。
それに気が付いて駆け寄るサクラ。
サクラ「ケンさん！　ケンさん！」
暗転。
曲は流れたまま。

●九場　二木田の裏切り
場所：ジャズ喫茶ＹＯＫＯＴＡ。
ソンスに銃を向けている二木田。
後ろから不意を突かれた格好で両手を挙げているソンス。
その手には銃が握られている。
二木田「銃を下に置け」
ソンス「……」
二木田「早くしろ！」
ゆっくりと銃を床に置くソンス。
ソンス「何の真似だ」
二木田「こっちに蹴ろ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

二木田の足元に銃を蹴るソンス。
その瞬間、銃の引き金を引く二木田。
右足を撃たれ倒れこむソンス。
二木田「ふっ、悪いな」
ソンス「貴様！」
足元の銃を拾おうと屈む二木田。
その隙を狙って飛びこんでくるソンス。
屈んだ状態で更に引き金を引く二木田。
両足を撃たれて倒れこむソンス。
笑みを浮かべながら銃を拾い上げる二木田。
二木田「気分はどうだ？……１０３１さん」
ソンス「何の事だ？」
二木田「しらばっくれてんじゃねーよ！　すぐに捕まえた所でシラをきるのは目に見えているんでね。今まで泳がせといた。喫茶店のまわりには既に私服警官が張っている。隠しカメラがあそこと、あそこ。盗聴器も仕込んである。私が指示を出せばすぐに突入する手筈に成っている。もう袋のネズミだ」
ソンス「……どうして俺だとわかった」
二木田「密告者がいた。お前の知っている人物だ」
ソンス「……あの野郎！」
二木田「残念だったな」
ソンス「わかった。俺が知っている情報は全て話すから見逃してくれ」
二木田「それでは毒ガス弾の隠し場所を教えて貰おうか」
ソンス「相模原から三浦半島へ向かう途中に……」
いきなり銃を乱射する二木田。
蜂の巣のように撃たれるソンス。
蜂の巣のように撃たれながらも立ち上がる。
そしてポンポンと手を叩いて二木田に辞めるよう合図をする。
ソンス「待て、待て。殺したらダメだ。毒ガス弾の場所を聞き出す前に殺したら元も子もなくなる。組織の情報を聞き出したいので生け捕りにしてくれ」
二木田「勉強になります」
ソンス「うん。確かに身の危険を感じて早めに処理したいのはわかる。相手は危険な思想を持っている反資本主義の活動家だ。君の報告ではカッパ男と名乗っていたようだが、警察の資料によると本名は萩原ケン太。通称ケン。警察もマークしている活動家で今ある社会制度を叩き潰そうとしている。おそらくコイツが１０３１の日本支部の

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ボスだ。毒ガス弾の黒幕で間違いないだろう。それとサクラという女。本名は柳井サクラ。柳井物産の代表取締役の孫娘で二年ほど前から突然消息を絶っている。幼いころから精神的な疾患があり、両親との折り合いも悪かったそうだ。そのような屈折した精神状態が犯罪に走らせたと思われる。私は柳井サクラにこの喫茶店で何度か会っている。柳井サクラがトラ吉に接触して我々の情報をスパイしていたんだ。手の込んだマネをしてきやがる。他に情報はあるか」

二木田「ミサイル、核ミサイルと言っていました」

ソンス「……核はマズいな、他にあるか？」

二木田「あと、間違えたと思った時は間違えている、とも言っていました」

ソンス「それは何かの暗号だな」

二木田「違うと思います。第三者に内容を知られないように変換した言葉であり、自分たちだけがその内容を知ることができる言葉です」

ソンス「それを暗号と言うんだ」

二木田「失礼しました」

ソンス「うん。かなりの隠語を使ってカモフラージュされたようだが、良く潜入してくれた。お陰で相手の情報が分かってこちらも手を打ちやすくなった」

二木田「二木田、やる時はやります」

ソンス「相手もまさか君の様な女の子がスパイだと思わないからな。警戒が薄いぶん成功率は高いのかもしれないな」

二木田「二木田、成功率高いです。やれば何でも出来ます」

ソンス「うん。手筈通りこの喫茶店での取引は君に任せる。女の子を待たせておけとの１０３１からの指示だ。君を人質にして逃げるつもりだろう。でも安心してくれ。盗聴器や小型の隠しカメラを使って、ネズミ一匹入ってきても分かるようになっている。私が監視カメラを見ているので何かあればすぐに突入する。他の捜査員も待機しているから心配しなくても大丈夫だ」

二木田「それなら、その情報をすべて教えてもらえないと困ります。そのうえで、本番の状況でシミュレーションをやらせてください。シミュレーションだろうと手抜きは良くないと思います」

ソンス「わかった。その前にこれを渡しておく」

日の丸のマークが入ったアタッシュケースを渡すソンス。

ソンス「この中には１０３１から指示された十億円分の金魂が入っている。重さを体で覚えておくんだ」

アタッシュケースの重さを確認する二木田。

ソンス「この任務が終了したら私と君はアメリカの英雄だ。好きなことをやりたいよう

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

にできる。君は運が良い。私がたまたまこの捜査の担当だったから君は自由になれるんだ。よろしく」
握手をしようと片手を出しかけて、その手を引っ込めるソンス。
そんなソンスに片手を差し出す二木田。
二木田「よろしく」
ソンス「……よろしく」
熱い握手を交わすソンスと二木田。
暗転。
曲『ピンクのハートでいっぱいよ』。

●十場　みんな大成功
場所：赤坂の豪華な音楽スタジオ。
高価な音響機器が並んでいる。
広い室内には高価なトレーニングマシンも置かれている。
高級な服を着て、高級なソファーに座っているサクラ。
そこに高級なスーツを着たケン太がやってくる。
ケン太「おはよう御座います（礼儀正しく）」
サクラ「おはよう御座います（礼儀正しく）」
ケン太「いやー悪い、悪い。ちょっと商談が長引いて遅くなちゃった。大手が何社か来て競合になってるんだ。もう金は腐るほどあるから要らないのにスポンサー契約やらなんやらでまた金が入ってくるぞ」
サクラ「御苦労様です」
ケン太「とりあえず一番金を積んだ所に決めるから任せとけ。それにしてもさ、金持ってる人たちってみんな優しくて親切だよな。今日の社長さん達も人として成熟してる感じがあって話が盛りあがっちゃたよ。それに引き換え貧乏な奴って心が卑屈で嫌だね。なんでもかんでも社会のせいにして文句ばっかだろ。妬みとか嫉みとかそんなのばっかじゃん」
サクラ「ケンさん、売れてるからみんな優しくしてくれるんですよ。昔のこともう忘れたんですか」
ケン太「ん～ぶっちゃけ忘れちゃったね。成功すると昔のことなんてどうでもよくなるみたいだね」
サクラ「まぁ、そういうものですよね」
笑い合う二人。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ケン太「あれ……タヌキはどこ？」
サクラ「タヌキ社長は離婚調停で遅れるそうです」
ケン太「そっか。カッパはどこ？」
サクラ「カッパはレコーディングの打ちあわせです」
ケン太「みんななにかと忙しいな」
サクラ「私もさっきまで雑誌の取材だったんですよ。絶対革命団サクセスストーリーって題名で、本当のことなんて話せないから適当に嘘八百並べておきましたよ。あっ、そうだ。取材現場でキジ君とサル君に会いましたよ」
ケン太「あいつら何してんの」
サクラ「バックバンドやってます」
ケン太「ふーん」
サクラ「モモちゃん、ＡＶ女優になったらしですよ」
ケン太「えっ、タイトルは？」
サクラ「さぁ」
ケン太「何処に売ってるの？」
サクラ「さぁ」
ケン太「ちょっと調べといて」
サクラ「はあ」
ケン太「うわー、買っちゃおっかな。まとめ買いしちゃおっかな。でも見たらショックだよな。……ショックだけど見たいな。……いや、ダメだ。見ちゃダメだ。モモちゃんと目線を合わせられなくなる。……でも見たい。……いや、むしろこれはチャンスだな。うん、これはチャンスだ。チャンス到来だ」
　照明が変わって、ここから一人で劇中劇。
モモ役「ケンさん、メールしてくれてありがとう」
ケン役「こちらこそお部屋にお邪魔して申し訳ありません」
モモ役「私のこと抱いてもいいのよ」
ケン役「自分はただ様子を見に来ただけですから」
モモ役「じゃぁこの札束はなに？」
ケン役「自分、不器用なんで取っといて下さい」
モモ役「こんなの受け取れないわ」
ケン役「自分は自分ですから。それでは失礼致します」
モモ役「ケンさん、またメールしてくれる？」
ケン役「モモさんからメールしてください。そして、もし、もし自分を待っていてくれるなら、入り口に黄色いハンカチをぶらさげておいてください。それが目印です。も

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

しそれが下がってなかったら俺は二度とモモさんの前には現れません。自分は自分ですから」
哀愁のある、ケン太の後ろ姿。
サクラ「あの、ケンさん」
照明が戻る。
サクラ「妄想しいているところに申し訳ないんですけど、タヌキ社長はツッパリ桃太郎をいきなり解散させて社運を賭けて絶対革命団を売り出したんですよ。私、蹴られましたもん。どんな手使ったんだって。ガンガン蹴られましたもん。髪思いっきり引っ張られてとっちめられましたもん。ぶっちゃけモモちゃんは無理ですよ」
ケン太「金をつぎ込めばなんとかなるだろ」
サクラ「ケンさんは、ほんとモモちゃんが好きですね。私にはよく分からないですけど天才は凡人とは違うどこかそういうところがあるんでしょうね」
大きなカバンを抱えて入ってくるトラ吉。
トラ吉「どうもこんにちは」
サクラ「トラさん！」
ケン太「お兄さん！」
トラ吉「お久しぶりです」
サクラ「いつ日本に帰ったの？」
トラ吉「今朝。事務所の人に聞いたら此処だって教えてくれたんだ。サクラちゃんをビックリさせようと思ってね」
ケン太「お兄さん、いつも突然帰って来るから」
サクラ「それで石油はあったの？」
トラ吉「それがさ……ドッカンドッカンでちゃって」
サクラ「マジで？」
トラ吉「マジで！」
サクラ「やったね！」
トラ吉「海底から湧き上がる瞬間さ、海が一瞬静かになるんだよ。しばらくするとゴーーて音がしてドッパーって噴き出すの。魂が震える感覚っていうのかな、人生はこんなに楽しいことで溢れているんだって心の底から思った。だから死んだらつまらないよ。人生って最高に楽しいし、最高に面白いからさ」
サクラ「私も今バリバリ充実してて物凄く楽しいんだ。私わかったんだ。純粋に真っ直ぐ生きることが大切なんじゃなくて、世の中の不条理を楽しむことが大切なんだって。その不条理の中で信念をいかに貫くかが大切なんだって。私今ね、死ぬのが物凄く怖いの。だって死んだって何も新しく始まらないよ。死んだら終わりだよ。新しく始ま

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

る訳ないじゃん」
トラ吉「やっぱそう思う。俺も死ぬのメチャメチャ怖いもん。死んだら勿体ないじゃん。この最高に楽しい人生を精一杯生きたいって思う」
サクラ「トラさんも幸せそうで良かった」
ケン太「お兄さん、どうせマドンナにふられるんだから」
トラ吉「それでね、金がおっつかなくて融資先を探しに帰って来たんだ。見つけたら直ぐに逆戻り」
ケン太「お兄さん、ダンゴぐらい食ってったらどうですか」
トラ吉「ケンさん、すみません。サクラちゃんと久しぶりなので話しこんじゃって。もうちょと話をさせてもらってもいいですか」
ケン太「こちらこそ、ちゃちゃ入れてすまん」
トラ吉「え～っと、でね、実は今からサクラちゃんのおじいちゃんに融資のお願いに行くんだ。だからサクラちゃんの了解を取っておかなきゃと思って。あっ大丈夫だよ。サクラちゃんの事は知らない振りするから」
サクラ「だったら私が融資するよ」
トラ吉「気持ちは嬉しいんだけどさ、億単位の金が必要なんだ」
サクラ「ケンさんも乗りませんか？」
ケン太「何が？」
サクラ「モモちゃんにつぎ込んだって金の切れ目が縁の切れ目ですよ。だったらトラさんに投資したほうが儲かりますよ」
ケン太「だって叩き売りだろ。的屋の儲けなんて微々たるもんだぞ」
サクラ「ケンさんと合わせて六億はいけるよ」
トラ吉「あの、まあ一応、真面目な話だからさ。大丈夫だよ。サクラちゃんの事は知らない振りするから」
サクラ「六億じゃ足りない？　もう少し待ってもらえればもっといけるけど」
トラ吉「足りるけど、ホントこれは真面目な話だからさ」
サクラ「私も真面目な話してるんだよ」
トラ吉「いやいやいや」
サクラ「ドンと任せて」
トラ吉「いやいやいや」
サクラ「大丈夫だから」
トラ吉「いやいやいや」
サクラ「ほんと、ほんと」
トラ吉「いやいやいや」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「いやいやいや」
トラ吉「いやいやいや」
サクラ「いやいやいや」
　お互い言い合いながら暗転。
　曲『ピンクのハートでいっぱいよ』。

●十一場　きたれカッパの穴の続き
　場所：スタジオ高円寺。
　せき込みながら倒れているケン太。
　それに気が付いて駆け寄るサクラ。
サクラ「ケンさん！　ケンさん！」
ケン太「飲みもの、栄養ドリンク、くれ」
　慌てて栄養ドリンクを渡すサクラ。
　その栄養ドリンクを一気に飲むケン太。
　落ち着きを取り戻す。
　その様子を観察している二木田。
サクラ「大丈夫ですか？」
ケン太「お、おう。ちょっと喉が詰まっただけだ。それで咳が止まらなくなって胸が苦しくなった」
サクラ「少し休みましょう」
二木田「ブラボー！」
　拍手をする二木田。
二木田「日々の激しい緊張の連続で精神がボロボロになっている様が伝わる素晴らしいシミュレーションでした。合格です。本当に素晴らしかったです」
ケン太「合格ですか」
二木田「合格です。よろしくお願いします」
ケン太「こちらこそよろしくお願いします」
二木田「組織の一員として頑張ります」
ケン太「おぉ、私たちのことを知っているだけあってノリがいいですね」
二木田「もちろんです。何でもお任せください。それとブツをお渡ししておきます」
　ケン太にエロインを差し出す二木田。
二木田「それとこれが私の連絡先です」
　連絡先が書かれた紙を渡す二木田。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

二木田「何かあったらいつでも連絡してください。すぐに駆けつけます。とりあえず今日のところは目的を達成したのでこれで失礼します」
部屋を出て行く二木田。
サクラ「ケンさん、カッパの穴が埋まりましたね」
ケン太「うん、カッパの穴が埋まったな」
サクラ「私たちのことを知ってる人で良かった〜。しかも波長が合う人で良かったです。二木田さんとなら仲良くなれそうな気がします」
ケン太「そうだな。組織の一員ってフレーズもノリが合っているし、これで一安心だ」
せき込んでうずくまるケン太。
自分の飲み物を渡そうとするサクラ。
ケン太「大丈夫だ。安心して力が抜けただけだ」
サクラ「ケンさん、私には体壊すぞって言っておいて自分は働きずくめでしょ。思想活動もやって、夜は警備のアルバイトもやって、絶対革命団の主宰兼、作詞兼、作曲兼、ダンサーもやってほとんど寝てないでしょ」
ケン太「若い頃は体力があったから無茶な生活でもやってこられたけど、そろそろきつくなってくる年頃だな」
サクラ「才能があるのに売れないってやっぱ悔しいですね」
ケン太「売れなくてもいいって約束だっただろ」
サクラ「そうなんですけど、タヌキ社長はツッパリ桃太郎につきっきりで絶対革命団なんて知らん顔ですからね。なんだか悔しくなってくるんです。でもね、そうした状況でも元気に振る舞っているケン太をみていると、ケンさんってやっぱ凄い人だな〜って思うんです」
ケン太「そんな誉めるなよ。照れるじゃねーか。……でも何だろう、これ？」
エロインを見るサクラ。
サクラ「マジックでエって書いてある」
ケン太「書いてあるね。変なの」
照明が変わる。
サクラの独白。
サクラ「この時、私の耳に天から神の声が聞こえました。チャンスは待っているのではなく動くことによってうまれる。一発逆転を狙うにはリスクが伴う。そのリスクをあえて冒すことによって、チャンスをつかむことができる。そのチャンスが今、目の前にある。これはまさしく衝撃と言う名のショックでした。魔法と言う名のマジックでした。奇跡と言う名のミラクルでした。アガサクリスティーが小説のストーリーを天から授かるように。サクラクリスティーも一発逆転のシナリオを天から授かったので

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

す」
照明が戻る。
サクラ「ケンさん、今日タヌキ社長に会いますよね」
ケン太「あぁ、百万円貰いに行くよ」
サクラ「えーっと……そうだ。……そうです。これは栄養剤ですよ。ほら、『エ』って書かれているのは栄養剤の『エ』です。二木田さんがケンさんの健康を気遣ってくれたんです」
ケン太「あーそういうことか。優しい子だな。じゃあ折角だから飲もうかな」
袋を開けようとするケン太。
慌てて止めるサクラ。
サクラ「ダメです、ダメです。これはそんじゃそこらにない高級な栄養剤です。だからこの栄養剤をですね、百万円のお礼としてタヌキ社長に飲ませてください」
ケン太「どうして？」
サクラ「どうしてもです。こんなに沢山あるんですから、独り占めしたらダメです」
ケン太「タヌキには勿体ないよ」
サクラ「うん……そうですね。それではケンさんも一緒にタヌキ社長と飲んでください。お互いわだかまりが残ったままだとこれからやりにくいじゃないですか。全てを水に流す意味を込めて高級な栄養剤をお互いが飲みあうんです」
ケン太「百万円貰える訳だし、まぁこれくらい飲ませてやるか」
不気味な笑みを浮かべるサクラ。
暗転。
曲『レオンのテーマ』。

●十二場　フランス人のジャン・レノ
場所：レオンマンションの一室。
映画『レオン』のテーマ曲が流れている。
薄暗い室内には１００円ショップ商品が散乱している。
割り箸で拳銃をつくっているジャン・レノ。
黒のニット帽とオーバルのサングラス。
そこに現れる二木田。
殺し道具を抱えている。
すばやく割り箸拳銃の銃口を二木田に向けるジャン・レノ。
殺気を放ったその動きは、まさに殺し屋そのもの。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

二木田「ジャン・レノさん、私です」
割り箸の拳銃をおろすジャン・レノ。
二木田「また殺し道具をつくっていたんですか？」
思わす照れるジャン・レノ。
持っている殺し道具をジャン・レノに渡す二木田。
その殺し道具を分解していくジャン・レノ。
二木田の独白。
二木田「フランス人のジャン・レノさんは、フランス政府が養成した優秀な殺し屋でした。五年前にフランス政府の指示で１０３１に潜入し、気まぐれから二木田の命を救ってくれました。それから二木田はフランス人のジャン・レノさんと行動をともにするようになり、殺しやスパイのノウハウを教えてもらいました。そのフランスから逃亡したのは三年前です。アジアを転々と移り住む生活をしていくなかで所持金は尽きていきました。そこで思いついたのが毒ガス弾を使った日本政府の脅迫です。とても手先が器用なジャン・レノさんは、二木田の計画通りに中国制の毒ガス弾を日本制の毒ガス弾と見分けがつかないようにつくり替えてくれました。その毒ガス弾を日本政府に送ったところ想像以上の効果があったのです。日本政府の周辺諸国に対する配慮が尋常でないことを知り、成功の確率はぐんと高くなりました。ＣＩＡに上手く潜り込めたのも運が良かったです。こうして毒ガス弾計画は二木田の目論見通り見事に成功したのです」
腕をつきあげてガッツポーズをみせる二木田。
舞台に『ＮＩＫＩＴＡが十億円の金塊を手に入れた』の文字がポンと現れる。
殺し道具の中には金魂が詰まっている。
金魂を確認して頷くジャン・レノ。
ジャン「ウィ」
暗転。
曲『レオンのテーマ』がそのまま流れる。

●最終場　１０３１！
場所：スタジオ高円寺。
スタジオには重い空気が漂っている。
廃人のようにイスに座っているケン太。
ケン太の様子を神妙な面持ちで見つめているサクラ。
サクラ「つまり、目が覚めるとタヌキ社長と裸で抱き合っていた訳ですね」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ケン太「……はい」
サクラ「つまり、その、やってしまった訳ですね」
ケン太「……はい」
サクラ「あのタヌキと、その、やってしまった訳ですね」
ケン太「……はい」
サクラ「やってしまった訳ですね」
ケン太「サクラ、俺は死ぬ。自殺の方法を教えてくれ」
サクラ「私、一つも上手く行ってないですよ」
ケン太「誰かに方法を聞いてたじゃないか、その人を紹介してくれ」
サクラ「ケンさん、人間は間違いを起こす生き物です」
ケン太「もう人間じゃない。ケダモノだ。野獣だ。モンスターだ」
サクラ「人間です。人間は間違いを起こす生き物です」
ケン太「間違いの度合いが違う」
サクラ「違いません。誰にでもそういう経験は一度や二度あるものです」
ケン太「本当か？」
サクラ「本当です。それを他人に言わないだけです」
ケン太「サクラもあるのか？」
サクラ「あります。あることにして頂いて結構です。やりまくりでも良いくらいです」
ケン太「サクラはレズなのか？」
サクラ「レズで結構です。だからケンさんもホモで良いじゃないですか」
ケン太「俺は違うんだ」
サクラ「ケンさん、やってしまったことはやってしまったことです。そのうえでどうするかです。タヌキ社長がモモちゃんとやっていたのと、ケンさんとやっていたのではやっていたことの度合いが全く違います。今こそタヌキ社長を利用して成りあがるチャンスです。ちょとくらいお尻の穴を使い合ったくらいなんですか。そんなもの小さなことじゃないですか。それよりも、どうか絶対革命団の為に立ち上がってください」
すっと立ち上がるケン太。
表情が笑顔になるサクラ。
ケン太「気持ち悪い。ちょっとトイレに行ってくる」
落胆してイスに座るサクラ。
そのまま出て行くケン太。
入れ違いでソンスが入ってくる。
ソンスを見て背筋が寒くなるサクラ。
ソンス「お取り込み中すいません。トイレはどちらですか？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

サクラ「今、出て行った人がトイレに行きます」
　ソンスが去るのを待っているサクラ。
　しかし、ソンスはスタジオを観察している。
サクラ「トイレはあっちですよ」
ソンス「あー、はい」
サクラ「何か用ですか？」
ソンス「いえ、なにも」
サクラ「トイレの場所を聞いてトイレに行かないのは不自然ですよ」
　苦笑いするソンス。
ソンス「トラ吉を手玉に取るくらいだ。そうやすやすと行かないのはわかっている。柳井サクラ、貴方は私が何者であるか既に知っている筈だ」
サクラ「知ってますよ」
ソンス「そうだろうな」
サクラ「ストーカーですね」
　笑うソンス。
ソンス「ストーカーとは上手い表現だ。こうなったら腹を割って話そう。君たちの指示した場所から毒ガス弾が出てきた。それにともない私の任務も終了し昇進のチャンスが台無しになった。日本政府はこの案件をマスコミ、とくに東アジアの周辺諸国に知られるのを恐れてトップシークレットにしている。日本政府の機密費が十億円無くなったところで困る者はいなからな。よって君たちが捕まる事はもう無い。私もプロとして潔く負けを認めている。そのうえでお伺いしたい。喫茶店のまわりには何重にも捜査員を配置して、ネズミ一匹進入しても分かるようになっていた。あらゆる状況を想定して周到に手を打った。それを隠しカメラにも写らずにどうやってブツを持ち出したのか教えてほしい」
サクラ「なんのことやらさっぱりです」
ソンス「そう易々と教えて貰えないのは分かっている。組織を売るわけにはいかない君たちの立場も分かる。それは私も同じだ。この世界にひとたび足を踏み込めばその存在はあってないようなものだ。お互い因果な道を選んでしまったようだな。だからタダで教えて貰おうとは思わない。そこで取引をしないか？」
サクラ「取引ってなんですか？」
ソンス「私は日本政府が持っている君たちの個人データを書き換えることができる。ごくごく普通の人生を送ってきたように偽装できる。その代わりどうやってブツを持ち出したのかそのトリックを今後の参考までに教えてくれ」
サクラ「トリックってなんですか？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ソンス「ブツだよ。ブツをどうやって持ちだしたんだ」
サクラ「ブツですか……あっ、お尻に入れたらしいですよ」
ソンス「あれだけの量はとても不可能だ」
サクラ「あっ、私はポケットに入れました」
ソンス「お前のポケットは四次元ポケットか！」
サクラ「違うんですか？」
ソンス「俺は命を賭けて乗り込んできたんだぞ！　ふざけるのも好い加減にしろ！」
恐怖のどん底に突き落とされるサクラ。
冷静さを必死に保とうとするソンス。
ソンス「冷静沈着が取り柄のこの俺をこれほど興奮させるとは流石だ。とてもトリックの方法なんか聞き出せそうにないな。まあ、最初から何も話しては貰えないだろうと思っていた。ここに来たのは君たちがどのような人物なのか直接会って確かめたかっただけだ。それを確かめられただけで充分だ。もし月日が経って話してもらえる時が来たら教えてくれ。そのときはコーヒーでも飲みながら話をしよう。まぁ、それまで俺が生きていればの話だがな」
『ジャコ・パストリアスのワード・オブ・マウス』が流れる。
美しい照明に変わる。
ソンスの表情は晴れ渡った青空のようになる。
ソンス「私はこれから中東に行く。今までとは比べ物にならないような危険な任務だ。しかし私は死ぬのなんか怖くない。どうして怖くないか分かるか？」
サクラ「……」
ソンス「死ぬ覚悟さえあれば怖くないんだよ。死ぬのは怖い事じゃない。むしろ新しく始められる。いったん終わりにして全てをもう一度始められるんだ」
トイレから戻ってくるケン太。
頬笑みをたたえるソンス。
ケン太に片手を差し出して握手を求める。
なんとなく熱い握手を交わすケン太。
ケン太「（サクラに）誰？」
サクラ「キ、キチガイです」
ソンス「今回は君たちの勝ちだ。面白い捜査だったよ」
高らかな笑い声を発しながらはけるソンス。
恐怖で震えているサクラ。
呆然と立ち尽くしているケン太。
ジャコ・パストリアスの音楽と、ソンスの笑い声だけが響いている。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

美しい照明とともに暗転。

END

（注）本作品の著作権はＳＨＯＳＡＫＵ事務所に帰属しております。本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

著作物の使用及びお仕事の依頼は下記まで。

著作権:SHOSAKU 事務所

連絡先:090-4961-6521

メールアドレス:info@sho39.com

ホームページ:http://www.sho39.com

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com